

講演会

設立 30 周年記念式典・記念講演会

日 時：平成 29 年 7 月 22 日(土) 14:00~16:30

場 所：札幌エルプラザホール

主催者挨拶



一般社団法人
寒地港湾技術研究センター会長
佐伯 浩

ただ今ご紹介いただきました一般社団法人寒地港湾技術研究センターの会長を務めております佐伯と申します。平成 26 年 6 月から会長を務めております。本日は当センターの設立 30 周年に当たるという年でございまして、式典の開催に当たり、来賓として国土交通省港湾局長の代理と致しまして技術企画課課長の稲田雅裕氏、それに北海道開発局局長の代理と致しまして開発監理部長の角南国隆氏をお迎えし、このように多数の関係各位にお集まりいただきまして、この記念式典を開くということができましたことは我々の望外の喜びでございまして。

さて、当センターは 30 年経ちますけれども、その前の 10 年間は任意団体としての活動でございました。北海道で港湾・海岸・漁港等に携わる研究者や技術者が一堂に会して、これからの北海道の海に関わることに貢献していこうではないかということで、当時、室蘭工業大学の教授で、現在は名誉教授になっておられます近藤先生から、そういう話を持ち掛けられました。私の前任の教授の尾崎先生だとか、応用物理関係におられました福島久雄先生等々とお会い

し、さらに北海道開発局の土木試験所の港湾海岸の研究をやっている方々とも話がありまして、とにかく海に関わる者みんなが集まって、北海道のために頑張ろうではないかということで、任意団体として北海道港湾海岸研究会が昭和 52 年に設立されました。手弁当でやっていましたので、なかなか会員各位あるいは北海道に大きな貢献をするまでには至らなかったかもしれませんけれども、それが一つの口火になりまして、その 10 年後に、特に北海道開発局港湾部の方々のご努力と運輸省港湾局のご理解を得まして、昭和 62 年 7 月 7 日に社団法人寒地港湾技術研究センターに対する設立の認可が運輸大臣から下りたわけでございます。これは任意団体としての 10 年間の活動が幾分かはそれに反映されたのではないかとございまして。そのように法人化しましてから、今年がちょうど 30 年目に当たるという年でございまして。

当センターの役割というのは、後で川合理事長から 30 年の歩み報告ということでご説明があらうかと思いますが、北海道は周りを海で囲まれております。日本では珍しく、太平洋・オホーツク海・日本海の三つの海に囲まれたところでございまして。漁業も非常に大事なところでございまして、島でございましてから、本州との間を結ぶ港湾も非常に大事でございまして。それから一部では防災場、北の海では流水が来る、それから太平洋側では津波の危険がある、冬は

日本海側が季節風によって暴風に曝される、そういう意味では海と北海道というのは非常に関係が深い。海をきちんと管理し、海を上手く利用することが、次の北海道をつくるために役に立つのではないかということで、鋭意努力するとしているところでございます。

この30年間、当センターを支えていただきました個人会員あるいは法人会員の皆様方にはあらためて厚く御礼を申し上げます。

30年の歩み報告



一般社団法人
寒地港湾技術研究センター理事長
川合 紀章

ただ今ご紹介いただきました、寒地港湾技術研究センターで理事長をしております川合と申します。本日は私も寒地港湾技術研究センターの設立30周年記念式典にご出席頂きまして、誠にありがとうございました。またこれまで寒地港湾技術研究センターを支えていただいた方には、この節目となります30年を迎えられたことにつきまして、心から厚く御礼を申し上げます。

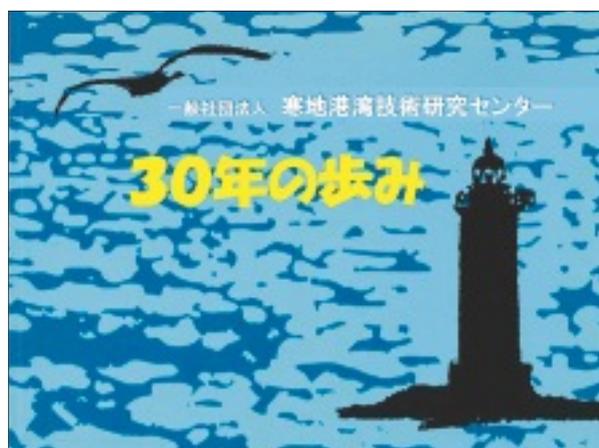
私の方からは「寒地港湾技術研究センター30年の歩み」と題して報告をさせていただきます。皆さんのお手元に「30年の歩み」と書いた一覧表があると思います。この中身の主要なものにつきまして、ご説明をして参りたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

まず寒地港湾技術研究センターができる前からの話でございます。先程の佐伯会長の挨拶にもございましたように、寒地港湾技術研究センターの前身は北海道港湾・海岸研究会という任意団体でした。昭和52年12月に産学官の技術

し、当センターの設立目的の達成に向けて、会員一同、またセンター職員一同が一丸となって、北海道の発展に寄与できればと考えております。これからのセンターへのご支援にも、皆様方には積極的に加わっていただければと思っております。本日は、この設立総会に集まっていたいただきまして、本当にどうもありがとうございました。

者・研究者の有志により設立されたものでございます。研究会としての活動は10年程行われましたけれども、事務局あるいは事業活動の全てが会員のボランティアによって行われてきたところです。活動としましてはシンポジウムだとか、技術講習会といったものを行ってきたところです。(写真-1)ただ、この研究会は600名ほどの会員がおりまして、専従者を置かない任意団体が600名の会員で活動しているということで、限界が出てきました。そういうことで、会員の方々から法人化した方が良いという声が集まってきたわけでございます。そこで昭和60年頃から法人化への動きを進めておりました。

昭和62年の6月に北海道港湾・海岸研究会の解散総会と併せて、寒地港湾技術研究センターの設立総会を開催致しまして、会員の皆様方に



法人設立の承認をいただいて、その上で運輸省に設立の申請書を提出したところでございます。その結果、(写真-2)にありますように、昭和62年7月7日に、当時の運輸省 奥山港湾局長から、私どもの初代尾崎 晃会長が法人の設立許可書を受領したところでございます。私どもはこの7月7日を設立記念日という形にしているところです。

なお当センターは運輸省認可の全国法人という形で法人を設立しております。北海道認可の法人と違うということで、実は北海道という名前を付けるのは望ましくないということもありまして、名前を「寒地」という形にしたと聞いております。

法人が認可されましたので、札幌駅の北口に

ありました当時の北ビルの9階に事務室を設置したところでございます。研究会の時代は自前の事務室を持たない状況でして、会員の皆様のご厚意によりまして、資料センターだとか事務室を会員企業に間借りして活動して参りましたので、事務室ができたということで、やっと形が整ったということでございます。(写真-3)

事務室もできましたので、法人としての活動が始まったわけですが、まず会員の皆様のための情報提供が必要ということで、会報である「港のたより」、それから機関誌である「海と港」を発行しております。(写真-4)「港のたより」は年に4回発刊しています。一番新しいのはこの7月に出しました121号です。30年掛ける4冊ということで、7月に121号の「港のたより」を出しています。また「海と港」は月に1回発



写真-1



写真-3



写真-2

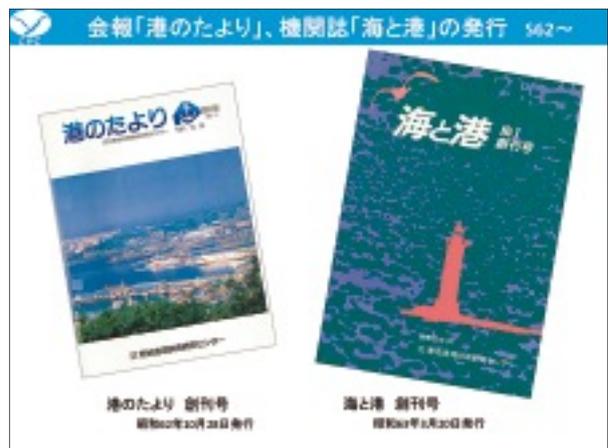


写真-4

行っていますが、これも昨年の9月に34号を発行したところです。これまで30年間の寒地センターの詳しい活動内容につきましては、この会報と機関誌に全て刻まれてきてございます。私ども寒地港湾技術研究センターのホームページには、この機関誌と会報の第1号からのバックナンバー全てが閲覧できることになっております。興味のある方は是非ご覧いただければと思います。

センター設立当時の初期に実施していた行事としまして、海外研修がございます。昭和62年7月にセンターを設立したわけですが、もうその翌年には第1回の海外研修を実施しています。当時は今と違ってなかなか海外に行く機会もないということで、会員の方から研修に参加される方の募集を行いまして、海外の港湾事情の視察を行っていました。第1回は(写真-5)にありますように、北米・カナダの港湾情勢の視察ということで、栗林 隆団長以下21名で海外研修を実施したところです。余談でございますけれども、この第1回の研修の途中でボストンに寄っているわけですが、佐伯会長の教え子であり当時アメリカに研究留学していました中沢直樹さんという方に大変お世話になっております。その中沢直樹さんの奥様は女優の中井貴恵さんでございまして、この一行もボストンで大

変中井貴恵さんにお世話になったということで、大変実りのある研修だったのではないかなと思います。こういった研修を2年に1回開催しておりましたが、平成13年の第7回を最後に、海外研修としては幕を閉じています。(表-1)これ以降は国際会議とか、いろいろな機会に個別に海外へ行く機会が増えて参りましたので、私どもはそういう機会に海外の情勢を把握してきたところでございます。

私ども寒地港湾技術研究センターが行う行事で今も続いている行事ですけれども、「ザ・シンポジウムみなと」というものを行っています。正確には私ども寒地港湾技術研究センターが事務局になりまして、実行委員会方式で開催しているところですが、毎年全道の港湾都市で、その時々々の港湾の話題をテーマにシンポジウムを実施しているところです。第1回を平成6年に札幌で開催致しまして、今年1月には第24回の「ザ・シンポジウムみなと」を函館で開催したところです。その時は「クルーズ振興」ということをテーマに開催しております。ちなみに第1回は(写真-6)にございますように、特別講演を頂いた漫画家のはらたいらさんが参加されています。当時は、マリ・クリスティーヌさんとか寺島実郎さんだとか、結構な有名な方々を呼んで、こういったシンポジウムを開催してきたところでございます。



写真-5

海外研修の実施状況		
	研修期間	研修箇所
第1回	昭和63年10月19日 ～29日	北米・カナダの港湾情勢
第2回	平成元年10月10日 ～22日	北欧の港湾研究施設及び港湾情勢
第3回	平成3年10月 1日 ～12日	北米西海岸・アラスカの港湾情勢
第4回	平成6年 1月26日 ～2月5日	オーストラリア・ニュージーランドの港湾情勢
第5回	平成8年 1月30日 ～2月9日	イタリア・モナコ・スペイン・イギリスの港湾情勢
第6回	平成11年 9月15日 ～26日	欧州(ハンガリー・オーストリア・ドイツ・オランダ)の舟運視察
第7回	平成13年10月 7日 ～18日	欧州(フランス・イギリス)の舟運視察

表-1



写真-6

行事ばかりではなく、私ども寒地港湾技術研究センターの本業についてお話しして参りたいと思います。寒地港湾技術研究センターは積雪寒冷地において冬に強い港湾整備のための技術を研究する機関という形で設立したところがございます。そういった研究を、私どもは自主調査研究であるとか、あるいは官公庁から受託した研究事業として研究を進めてきているところです。そしてそういう研究の成果がある程度まとまった段階で、マニュアルという形でその情報をいろいろと発信してきております。(写真-7)の左側にあるマニュアルが平成5年に寒地港湾技術研究センターで初めて発刊したマニュアルで、「海洋性水中コンクリートの施工」というものです。右側が一番最近発刊致しましたマニュアルでございまして、今年の5月に「寒冷



写真-7

地における沿岸構造物の環境調和ガイドブック」として発刊したところです。

このようなマニュアル類をここに示したような形で、これまで幾つか発行してきています。(表-2) 2番目にあります「氷海域における海岸・海洋構造物設計マニュアル」、これは正に寒地港湾技術研究センターの真骨頂的なマニュアルでございます。また下から2番目にあります「津波漂流物対策施設ガイドライン」、これは全国に先駆けて私ども当センターで検討してきたものでございます。当センターの設立目的に従った業績を、これまでこういう形で着実に果たしてきているところでございます。

そういった調査研究の成果として、実際に整備された港湾施設を紹介して参りたいと思います。

(写真-8)に写っているのは、世界で初めて流水を海中から見られる施設である、紋別港の氷海展望塔であり、平成8年に整備したものでございます。この設計に、私どもセンターが氷海域研究の知見を基に関わってきたところです。なおこの施設は隣接致します親水防波堤とともに、平成8年の土木学会技術賞を受賞したところでございます。

次にサロマ湖のアイスブームのご紹介でございます。(写真-9)サロマ湖では流水期に流水が

技術マニュアル等の発刊状況	
発刊時期	発行・刊行している出版物
平成5年3月	海洋性水中コンクリートの施工 (ケーシング工法)
平成8年3月	氷海域における海岸・海洋構造物設計マニュアル
平成10年11月	寒冷地における自然調和型沿岸構造物の設計マニュアル —薬曝・産卵機能編—
平成17年3月	新構造形式ケーソン技術マニュアル —プレキャストフォームケーソン編—
平成19年1月	新構造形式ケーソン技術マニュアル —斜面スリットケーソン編—
平成26年3月	津波漂流物対策施設設計ガイドライン
平成29年5月	寒冷地における沿岸構造物の環境調和ガイドブック

表-2

沿岸に押し寄せた時に、ここに開いている湖の口から流水が湖内に入ってきて、湖の中にあるホタテだとかカキの養殖施設が被害に遭うということがたびたびありました。そこでアイスブームと呼ばれる流水流入対策工を整備することに致しまして、平成10年にこういう形で完成しています。それ以降は流水が中に入っていないということで、養殖施設の被害も収まっていますし、さらに海明けしてオホーツク海沿岸の氷がなくなっても、これまでは湖の中に氷が残ってしまって漁船がなかなか操業に出られなかったのですが、それ以降は海明けとともに漁船も操業に出られるという、非常に大きな効果のある施設です。これにつきましても、私どもの氷海域の研究の成果によりできた施設ということでございます。



写真-8



写真-9

次に津波漂流物対策施設でございます。(写真-10)これは岸壁沿いにロープなどでできた柵のようなものを整備することで、津波の時に漁船が陸に遡上することを阻止する。あるいは引き波で陸の自動車などが港湾の中に転落する、そういったことを防ぐ施設でありまして、日本で初めて平成19年に釧路港に整備したものです。ちょうど整備して4年後の平成23年に東日本大震災が起こりました。それでかなりの津波が来たわけですが、この施設が十分に機能したということでございます。余談ですが、私は東日本大震災の時は東京におりまして、津波の中継をテレビに食い入るように見ていました。当時、この施設が整備されたのが釧路港と十勝港でしたが、NHKの生放送で十勝港が映りまして、この施設が十勝港の石油タンクを守っているのを東京で見ました。この施設を造っておいで良かったなと思った次第でございます。

私ども寒地港湾技術研究センターの研究はこういう形で寒冷地の港湾をフィールドとしていますけれども、先程説明した時に、全国法人だったので「北海道」という名前がつけられなくて「寒地」という名前をつけたというお話をしました。これが結構怪我の功名と言いますか、「寒地」にしたお陰で北海道に限定しないで、世界の「寒地」に羽ばたけるという結果になったのではな



写真-10

いかと思っています。まず一つの例として、北方四島があります。人道支援事業と致しまして、平成8年に国後島の古釜布港に日本政府が北方四島に初めて栈橋整備をするということになりました。(写真-11)当時、外務省の人道支援委員会事務局から、私どもセンターの方にお声が掛かりまして、当センターで調査・設計、それから施工監理を現地で行って、こういう形で平成10年に整備したところでした。こういった実績を基に、今回、ご承知のように、安倍総理とプーチン大統領が四島の共同経済活動に合意して、つい最近6月の下旬から7月の初めに官民現地調査団が組まれたわけですが、このように氷海域の設計の実績もありますので、その調査団に私どものセンターの宮部企画部長が参加をしたところでした。今後、このような共同経済活動の進展によりまして、寒地港湾技術を発揮する場所もさらに広がっていくのではないかと考えているところです。

北方四島だけではなく、当センターは北東アジアとの繋がりも深めて参りました。平成15年から「北東アジアネットワーク研究会」というものを組織致しまして、極東ロシアであるとか、中国東北部を対象に調査研究や交流活動また道内企業の海外進出の支援を行ってきたところです。(写真-12)に写っているのは、その成果の一つとして、左上の方が平成18年に民間サイドの



写真-12

話ですが、道内の建設企業が参加するサハリン州合弁会社の設立がなされた時の写真でございます。右下の方は北海道庁とサハリン州との間で作られた、サハリン州港湾整備検討合同作業部会です。この日本側の代表が当センターの当時の理事長でした小泉理事長ということで、相手側はサハリン州政府の方です。この二人の間でサハリン州の交通インフラのための情報交換だとか、調査に向けた覚書に署名したところがございます。こういった形で北東アジアネットワーク研究会を自主研究として行ってきたわけですが、成果も上がってきているところです。

私どもはこういった寒地港湾技術研究の他に取り組んでいるものが幾つかありますが、その一つとして廣井勇博士の業績についての研究がございます。(写真-13)廣井勇博士は明治から大



写真-11

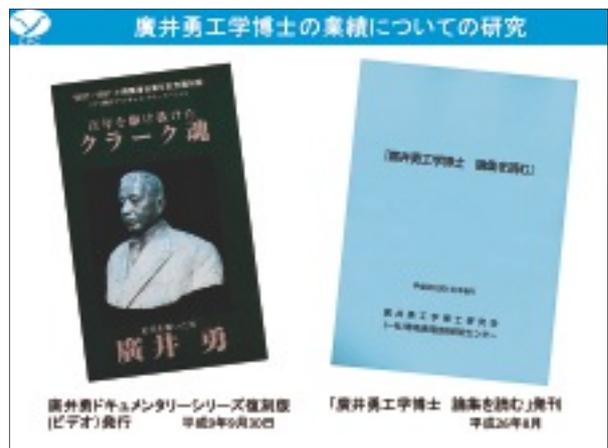


写真-13

正期にかけまして日本の土木界で活躍された方ですが、小樽築港事務所初代所長にして、日本の港湾工学の父とも言われる工学博士でございます。道内では小樽港だけではなく函館港・釧路港・留萌港など、多くの港でその足跡を遺された方です。当センターにおきましては、長年にわたりまして廣井勇博士の業績についての研究を行っているところです。

さて私ども寒地港湾技術研究センターは、これまで述べてきました自主研究を行っているだけではなく、そういった研究で培った技術力を基に開発局だとか港湾管理者の皆様方から調査研究事業を受託しています。その受託事業の一つの柱となっていますのは、事業計画資料作成業務と言われる発注支援業務です。当センターの現場技術職員を開発局の各港湾事務所に常駐させておりまして、(写真-14)にありますようにCADによる図面作成などの内業支援業務を行っています。平成19年に受託を開始してから、現在は14港の港湾事務所に19名の職員を常駐させているところです。

さらに私どもは、先程、港湾局長様のご挨拶にもございましたけれども、港湾の施設についての技術基準に関する確認機関として平成19年に登録されています。(写真-15)これは何かと申しますと、民間の会社などが「港湾の施設」



写真-15

を造る場合、その施設が国交省の技術基準に適合するかどうかをチェックしなければいけません。そのチェックをする機関として、私どもが登録されているところです。全国を沿岸技術研究センターさんと、それから私ども北海道は寒地港湾技術研究センター、この2法人でカバーしてこういった確認申請を受けてチェックをしているという状況です。

平成21年になりまして、それまで事務所を置いておりました札幌駅北口の北ビルが建て替えられることになり、私どもの寒地港湾技術研究センターは現在の住所の北11条にありますセントラル北ビルに移転して参りました。現在もここを当センターの事務所として業務を進めているところです。(写真-16)



写真-14



写真-16

平成 25 年になりまして、私ども寒地港湾技術研究センターは大きな転機を迎えました。それは法人法の改正によりまして、法人は公益法人か一般法人のどちらかに移行しなければいけないということになりました。当センターは一般社団法人の道を選択致しまして、平成 25 年 3 月 19 日に安倍内閣総理大臣から当センターの第 2 代目の会長であります土岐会長に対し、移行の認可書が交付されました。これまで当センターの監督官庁は国土交通省でしたけれども、それ以降は他の全国法人と同様、法人の監督官庁と致しましては内閣府になったわけでございます。(写真-17)の右上は、新しく一般社団法人になった寒地港湾技術研究センターの約款の中にある目的です。あらためてここでご紹介させていただきますと、「この法人は積雪寒冷地の氷風雪・波浪の制御及び利用に関する港湾技術並びに港湾の利活用に関する調査研究に努め、もって積雪寒冷地において冬に強い港湾の整備を促進し、我が国の港湾及び地域社会の発展に寄与することを目的とする」ということで、私どもは一般社団法人として新たなスタートを 25 年に切ったわけでございます。

さてその新しい一般社団法人の組織をこれまでの変遷と併せて見ていきたいと思えます。(図-1)の一番下にありますように、私どもは現在 4 部体制で業務を実施しています。ただ 30 年



写真-17

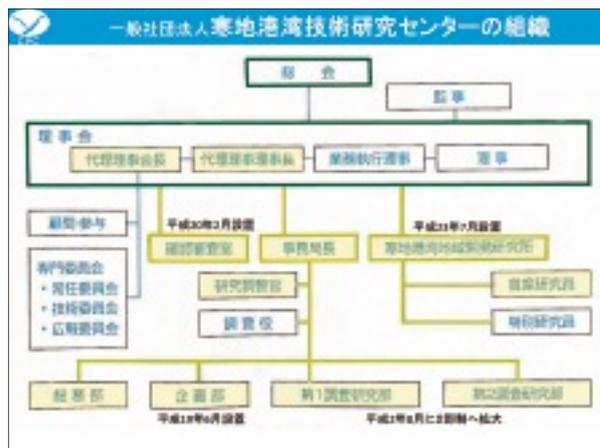


図-1

前にセンターを設立した時は、総務部と技術部の 2 部体制でした。平成 2 年に技術部が二つの調査研究部になりました。さらに平成 19 年には企画部を創設致しまして、現在の 4 部体制となったわけです。また先程説明致しました、確認登録機関になったことから平成 20 年にそれを行う確認審査室を設置致しました。さらに港湾の利活用に関する研究を進めるために、寒地港湾地域開発研究所を平成 23 年に設置致しまして、現在の組織になっているところです。

さて受託研究調査を我々官公庁から受託させていただいてございますが、これも年々増えておりまして、昨年度は 23 件に増加したところです。こういった仕事の中で、開発局の業務の内、優秀な成果を収めたものにいただける開発局長表彰というものを私どものセンターもこれまで 3 回受賞させていただいております。この内、平成 26 年度に受賞致しました「北海道における港湾貨物の流動実態調査」の結果につきまして一部、(図-2)に紹介しています。私どもは、先程まで説明致しました港湾施設のハード的な研究だけではなく、こういった港湾物流などのソフトの研究についてもいろいろと成果を上げてきているところです。よろしくご理解いただければと思います。

最近、私ども当センターが力を入れている研究と致しまして、北極海航路などの北極域の研

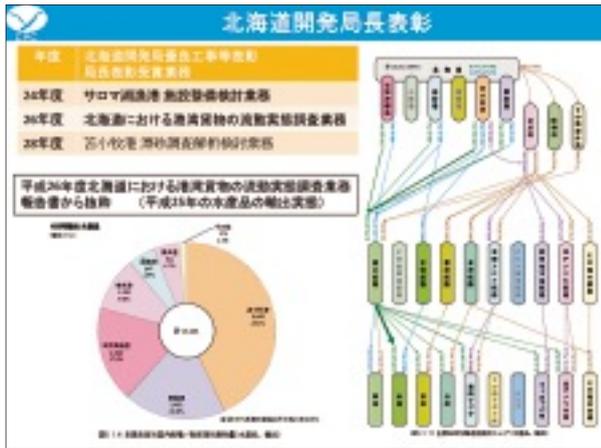


図-2

究がございます。これは、これまで当センターが培ってきました、いわゆる氷海域のハード的な研究に、今申し上げましたような物流などのソフトの研究、そういった成果を併せて活用できる事業であるということで、今、積極的に取り組んできているところです。(写真-18)は昨年7月に日中韓の北極域の研究者が集まる国際会議を当センターが現地事務局として主催したものです。当センターの現会長であります三代目の佐伯会長が開会挨拶をしているところの写真です。ちなみに私ども寒地センターが主催した国際会議は、これが2回目でございます。1回目は平成5年に「海洋エネルギー開発国際シンポジウム」という国際会議を主催したところです。実はこのカモメが飛んでいて下にCPCと書いているシンボルマークができたのは、この

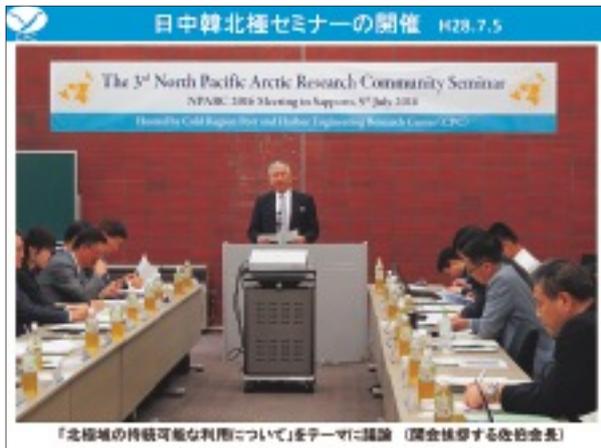


写真-18

平成5年の国際会議にあわせて制定しているところです。今もこのマークを我々のシンボルマークとして使っております。

北極海航路のお話に戻します。昨年9月から北極海航路に関する最新の情報をロシアのいろいろなウェブサイトから収集致しまして、そのロシア語を翻訳して重要なものを取りまとめて、その情報を発信する「北極海航路通信」というものを2カ月に1回、私ども寒地港湾技術研究センターのホームページから情報発信しているところです。(図-3)手前味噌ですが、この「北極海航路通信」は大変良い評判をいただいております、これを見たいということで当センターの個人会員になられる方とか団体会員になられる会社が結構増えてきているところです。このように私ども寒地港湾技術研究センターは、研究フィールドを世界に広げてきているところです。

これまで30年の歩みを見て参りました。最後に今後10年間の展望を述べたいと思います。私どもは(図-4)の左上にありますように、これまでは港湾の整備に対する支援を中心に行って参りました。寒地港湾整備の氷海域の研究などの技術的な支援、あるいは発注者支援業務などの人的支援という形で、北海道の港湾の整備に対する支援を主な業務にしてきております。ただ



図-3

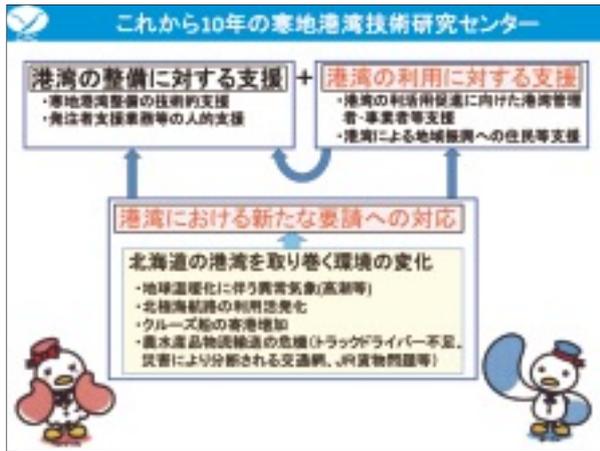


図-4

最近では港湾の整備量もどんどん減ってきているということもありまして、最近、力を入れてきているのは、(図-4)の右側でございます。港湾の利用に対する支援ということで、港湾の利活用促進に向けた港湾管理者であるとか物流事業者、そういった方々の支援、あるいは港湾による地域振興への住民等への支援ということで、みなとオアシス等の地域のウォーターフロント活動などの支援に力を入れて参っております。先程組織のところでご説明しました平成23年につくりました地域開発研究所というのは、まさにこれをやるための研究所として創立したものです。こういった港湾の利用の支援をすることによって、さらに港湾整備量の増加にも繋がるということもあって、こういうことに対して力を入れ始めてきているところであります。

もう1点、今後、力を入れていくことが、港湾における新たな要請への対応ということでございます。北海道の港湾を取り巻く環境は非常に最近変わってきています。一つには地球温暖化によって異常気象が生じている。根室の高潮が生じたこともありました。そういった地球温暖化に伴う異常気象、こういったものへの対応もしていけないといけない。それから先程来

言っています北極海航路、これに対する対応をしていく。それからクルーズ船につきましても、先程、港湾局長様の挨拶にもありましたように、日本中でクルーズが増えていますし、北海道でもクルーズが増えているということで、こういったクルーズ船への対応も行わなければいけない。もう一つ、北海道における農水産品の物流が現在非常に危機的な状況になってきているという事実があります。それは何かと言うと、一つは規制強化によるトラックドライバー不足という問題、あるいは地球温暖化によって災害が起きて、昨年の台風30号で道東の道路網・鉄道網がズタズタにやられました。特に出来秋の農水産品を一番輸送しなければいけない時期に道路網・鉄道網が寸断されてしまう。さらにJR貨物自体も問題がありまして、JR北海道の路線維持の問題、あるいは北海道新幹線が青函トンネルを通ったことで、青函トンネルの容量がだんだん少なくなって、貨物がなかなか通りにくくなるという可能性も出てきているということで、北海道の農水産品の輸送にとって港湾の占める位置が大きくなってきている。こういった北海道を取り巻く港湾の環境の変化、こういうものに対して私ども寒地港湾技術研究センターとしてもいろいろ研究ですとか対応策を今後は力を入れてやって行きたいというふうに考えている次第でございます。

以上、30年を振り返りまして、今後10年の展望も致しました。本日、ご出席の皆様方におかれましては、引き続き寒地港湾技術研究センターの支援・お力添えを心からお願い致しまして、私からの「30年の歩みの報告」とさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

記念講演



講師

明楽 みゆき 氏

皆様、こんにちは。本日は、寒地港湾技術研究センター様、30周年おめでとうございます。30年の歩みを聞かせていただきまして、本当にたくさんの素晴らしい業績をお伺い致しました。サロマ湖のアイスブーム、そして北極圏の航路といった、なんだかワクワクするような話まで聞かせて頂いて、30年の歩みはホームページに載っていますよとお伺いしましたので、ぜひ私も後程見させていただければと思っております。

今日は北前船の話、このような貴重な機会に、江戸時代そして明治にかけて日本の物流の要となった北前船の話、そして港、200カ所の寄港地がございますが、そのような港の皆さんと交流している様の一端を、皆様に知っていただければ嬉しいな、そのような思いでおります。また、チェンバロという楽器を持って参りました。私はいつもチェンバロを自分の車に積みまして、そして北海道から九州まで北前船講演というこ



写真-1

とで走っております。

チェンバロは元々5000年前の豎琴です。今は2017年ですから、紀元前3000年前に、豎琴として動物の骨の枠、そして羊の腸を振ったガット弦を指でつま弾いて自分の思いを音に変える、そのような豎琴がエジプト文明、そして黄河文明、メソポタミア文明、インダス文明、そのような四大文明、人類の英知が結集して花開いた、そのような時代に愛されていた豎琴が、チェンバロの母です。ですから、寄港地の港の皆様には、それぞれの港の故郷の歴史を豎琴の音色を聞きながら一緒に思い出しませんか、そして思いを馳せて、未来をともに考えませんか、そのような活動をしております。

まずは1曲、チェンバロとはどういう音なんだろうと、それを聞いていただければと思います。1曲目はバッハの曲を弾きたいと思います。このバッハという作曲家、江戸時代の作曲家です。1685年に生まれました。1600年が関ヶ原の戦い、そして江戸時代が始まりまして、江戸中期からは北前船が日本海を往来し始めました。浪花の港を春に出発し、瀬戸内海を通過して下関、そして日本海、そして日本海をずっと北へ北へと北海道へ参りました。そして北海道から折り返し、また浪花の港に戻るのには秋、半年間で1年分の稼ぎを行う。そのような商いのするのが北前船でございました。その江戸時代の作曲家でありますバッハの「前奏曲」、後程「アヴェ・マリア」として非常に愛される曲となりました。それではお聞きください。

《演奏》

バッハ「前奏曲」

ありがとうございます。

今、お聞きいただきましたように、本当に細

い細い弦を、0.3 mm という 1 mm の 1/3 の薄い爪で下からポンッと弾いて音を出す擦弦楽器です。そうやって自分で小さな爪を 200 程作りまして、そしてその薄い先をさらに外科のメスでもっと薄くして弦に当たった時にきちんと撓って音を開放するように、自分で音色を育てる楽器でもあります。またこの楽器は 4 年掛かってやっと 1 台ができるという工芸品のような楽器でもあります。イタリアで生まれましたけれども、今では日本の作家さんが世界で最も繊細な響きを出します。やはり工芸の国「日本」だなど、なんだか嬉しい思いになります。それでは始めたいと思います。

北前船というのは先程申し上げましたように、浪花の港を出て、瀬戸内海の赤穂の塩や広島尾道のお酢を積んで、下関から日本海、日本

海に出ますと直ぐに島根県があります。島根県ではたくさんの砂鉄が採れておりました。その砂鉄を積んで後々富山の高岡では大きな鯨釜に変わります。そして北見のハッカ釜も作られました。北前船というのはドングリ船と言われて、そして 1 枚の帆で風だけで動く、そのような頼りない船でもあります。(写真-3)

ですから、バラストとして船底にはそういうしっかりした鯨釜やハッカ釜などが積まれて、石の産地の福井では鳥居もバラバラにして船底に入れ、手水鉢も入れて、狛犬も入れて、そのような重い物をしっかりと積んで、北へ北へと参りました。そうして参りました北海道では鯨が捕れて捕れて、足の踏み場もないのですね。(写真-5)は小樽の港の様子です。本当にたくさんの北前船がこのように停泊していました。こ

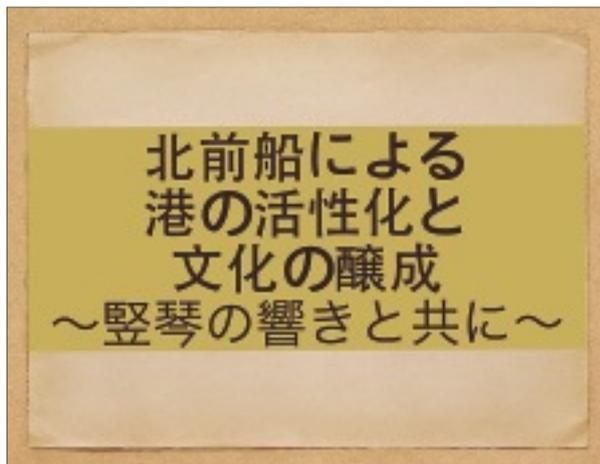


写真-2



写真-4

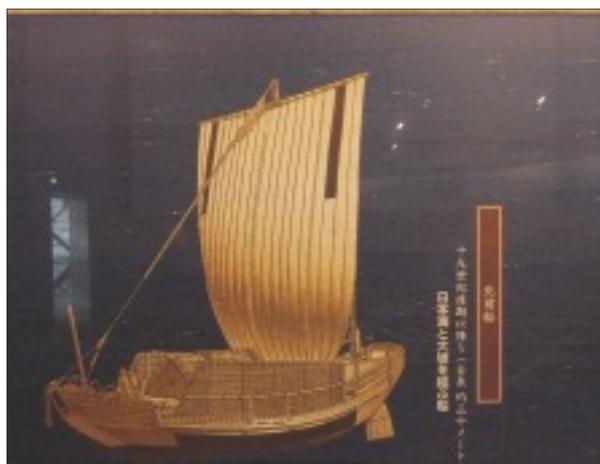


写真-3



写真-5

のように停泊している時には帆を畳みますので、このような姿なのですね。そうして鯨釜で腹を割いて茹でまして、そして茹でた鯨をグツと金具で締めます。そして油とポロポロになった粉とを分けます。その粉の方が鯨粕、メ粕として、非常に全国的にも歓迎され、そして低価格で売られ、全国の文化を育てた大元となりました。

船は（写真-3）のように不安定な形でもあります。京都の町屋というのはうなぎ床と言われて、間口が狭くて長いのが京都の町屋の特徴ではありますが、やはり北前船も長さで税金が決まっていたので、なるべく船主は短い長さにしたい。しかしたくさん積みたいと。そんなこともあって、ドングリ船と呼ばれる程コロンとした形になりました。ですから、航海の安全という意味では非常に不安定な面があって、船主は必ず航海に出る前は金毘羅様などに（写真-6）のように船絵馬というものを奉納しました。たくさんの各地域の神社には船絵馬が奉納されています。（写真-8）は非常に珍しい、停泊しているのに帆が張られている、これは小樽の港です。おそらく非常に良いお天気だったのでしょう。風もなく帆を乾かしているのではないかとされています。このような姿がやはり北前船としては一番皆さんの印象に残っている姿ではないかなと思います。



写真-6

私の五代前の先祖は近江で生まれました。天保元年に生まれました。初代増田利兵衛です。（写真-7）

琵琶湖の畔、愛知郡島川村という寒村に生まれたわけですね。琵琶湖の畔に生まれました。琵琶湖というのは本当に立派な湖です。やはり日本一の湖はこんなに広いんだと思うぐらい、向こうの水平線が見えて、湖と思えないぐらい広い。ですから、琵琶湖に生まれた者は、モロコなどのいろいろな小魚を捕り甘露煮にして、一生豊かに暮らすことができます。しかしおそらく私のその五代前の先祖、初代増田利兵衛はもっと大きな商いがしたいと思ったのでしょう。大海原へと思ったのか、北前船の船主になりたい、そのような野望を抱きました。そのようにして、行商を始めたわけです。



写真-7

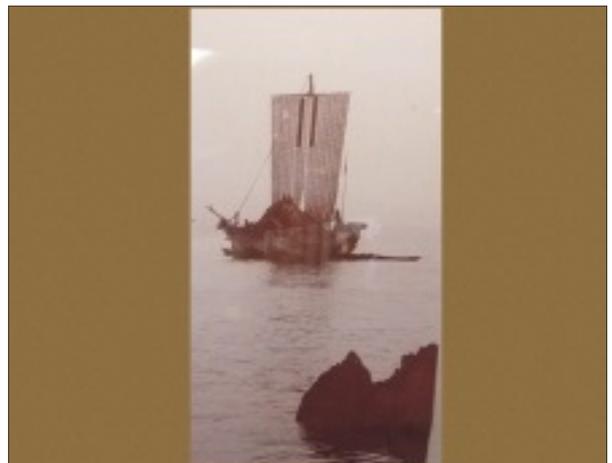


写真-8

天保元年はあと 40 年程で明治維新が来るという、そのような江戸末期です。ですから、そのように行商している人達は、夕方暮れてきたら手ぬぐいを持って銭湯にでも行こうという、そんな習いがあったかもしれません。しかし、我が家には何も家宝などはありませんが、古い古い桐の箱に入った天秤棒が 1 本だけ残っています。(写真-9)

そして家訓というほどではありませんが、このような言葉も残っています。「夕べに星をいただき、朝に星をいただく」と。みんなが銭湯に行っている間も天秤棒を担いで歩いて行商をして、朝は星が出ている内から働けと。そのようにして琵琶湖の畔の近江の国から丹波まで歩き、そして丹後半島、日本海まで歩いて行商していました。その甲斐あってか、やっとの思いで中古の三百石の北前船をかうに至りました。そしてさらに行商して中古の五百石、遂には千石船を何隻か持つに至りました。住吉丸、権現丸、大きな神様と書く大神丸、そうして船頭さんはお約束の石川県橋立の方です。一時、石川県の橋立は日本で一番金持ちの町と言われていました。船頭の町だったのですね。船頭さんというのは采配を振るいます。そしてその半年分の稼ぎというのは船頭さんの力に掛かっているわけです。「今年は石川県のこの人をお願いしたけれども、売り上げがこうだったから今年はこ



写真-9

ちらに変えよう」ということが、残っている巻物などにも書かれています。そして「岩内の沖で非常にひどい嵐にあったけれども、なんとかやり過ごした」、そんなことも書かれています。北前船というのは仏壇と神棚を隣り合わせに置いて、船の安全を祈りながら進む、祈りの船でもありました。そのようにしながらなんとか自分の時代を終わることができた、そのようなことがこの一代記に書かれています。江戸時代から残っているそのような巻物が我が家には代々伝わっていました。

そうやって明治時代になってだんだん蒸気船が出てきて、もうこれは北前船の時代もそろそろ終わりだなと思った時に、北前船の船主達は自分達の船を売却し始めたわけです。このようにして北前船の船主達はたくさんいました。しかしそうやって時代の終わりを感じて、うちの先祖の初代増田利兵衛もやはりそうでしたが、自分の千石船を全て売却しました。その売却したお金を先祖の島川村という寒村の神社の社殿に寄進して、そしてお寺の屋根を葺き替えて、生け垣をつくり、そのようにしてほとんど全てそれに注ぎ込んで、残ったわずかなお金で京都に出て、そして呉服屋になりました。ちょうど北海道の港では、まさに増毛には本間家という素晴らしい豪商がいらっしやいました。北前船の船主であります。この時代の終わりとともに酒造り、そして国稀へと、そのように素晴らしい事業をなされました。そして本間家と言えば呉服屋さんでもあります。そのように一時期の留萌・増毛の華やかな時代をつくられた、そのような豪商でもありました。

そうやってそれぞれの北前船の船主達が夢を抱いて情熱を持って 150 年前にそれぞれの港とご縁を得て交流をしてきたこと、そういったことが宝だと言っていただけの時代になりました。2017 年 4 月 28 日に北前船が日本遺産に認定されました。(写真-10~12)

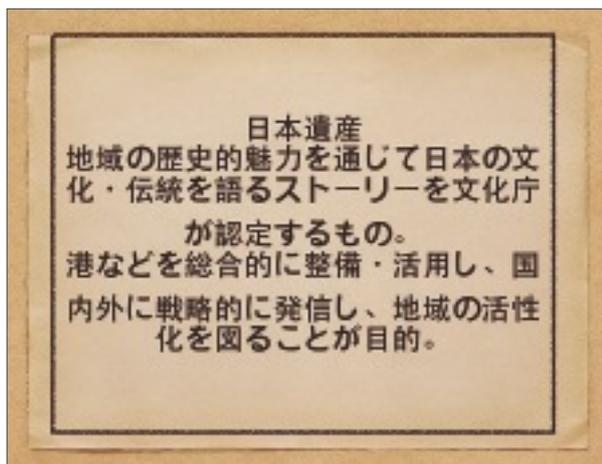


写真-10

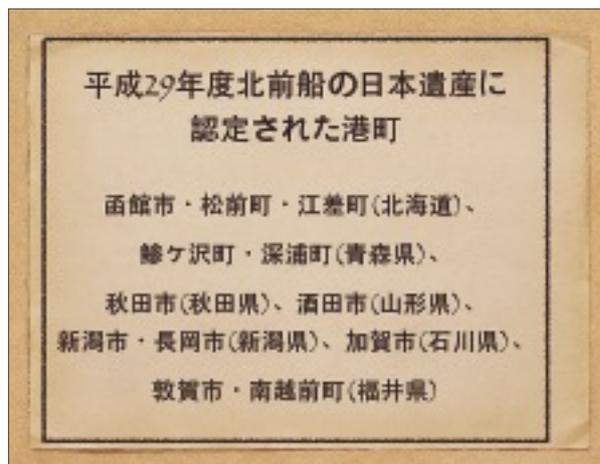


写真-12



写真-11

それもその中の寄港地が自分達のそれぞれのストーリーを持って、それを今後活用して国内外、もちろん国際的にでもありますが、戦略的に発信し、地域の活性化を図ることが目的と書かれています。まさにそれぞれの土地にはそれぞれの物語があります。江差には江差の物語、函館には函館の物語、そして秋田には秋田の物語、酒田には天領米を運んだという物語、加賀にはまさに輪島の漆器を運んだという物語、そのようにしてそれぞれみんな豊かな故郷の歴史を持っているのです。そういったものを自分達だけが知っている、あるいは自分達より年配の世代が郷土史家のようにして一生懸命研究会を開いている。いやいやそれだけじゃない。もっと後世に伝えましょうということで、日本遺産という認定をいただき、そしてそれがまさに今、

地域の方々、そして子供達へと、そういった思いを持ってつくられました。江差だけは単独で申請されて、単独で日本遺産の町として認定されました。それ以外の11カ所は、いわゆるシリアル型と言いますが、まとまった形で北前船の船主の寄港地として認定されました。小樽も実はこの中には入っていませんが、今、一生懸命申請の準備をされています。今年の7月25日、もうすぐですが、それまでに申請された人達は平成29年度の日本遺産の町として認定されます。ですから、今年是非と思っていられっしやる町の方、あるいは来年、やはりストーリーを作るのは2年掛かるかなと言っておられる町もあります。しかし日本遺産が平成29年4月28日に決まったというニュースが日本中に流れた時に、本当にその寄港地200カ所の方々の声がワーツと私は聞こえました。メールもいただきました。お電話もいただきました。「やったね」「すごいね」「これからうちの町も何かやっていけるかもしれない」「うちの村も大丈夫かもしれない」「これから日本遺産でいろいろと頑張れるかもしれない」「子供達ともいろいろなイベントをどんどんやって行こうね」と、なんだか急に町が元気になった、そんな波をすごく感じました。海の時代だな、港の時代だな、そんなふうにも思いました。

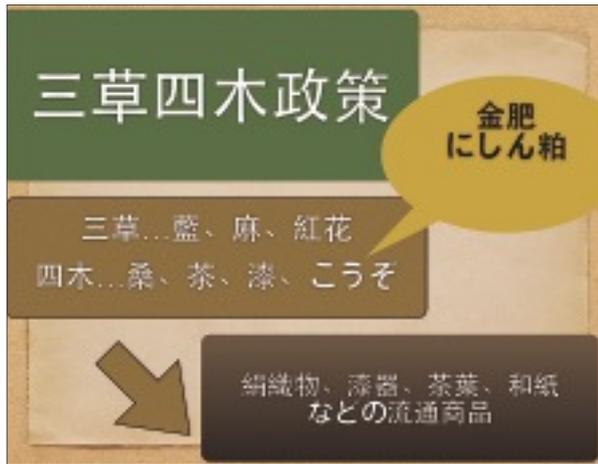


写真-13

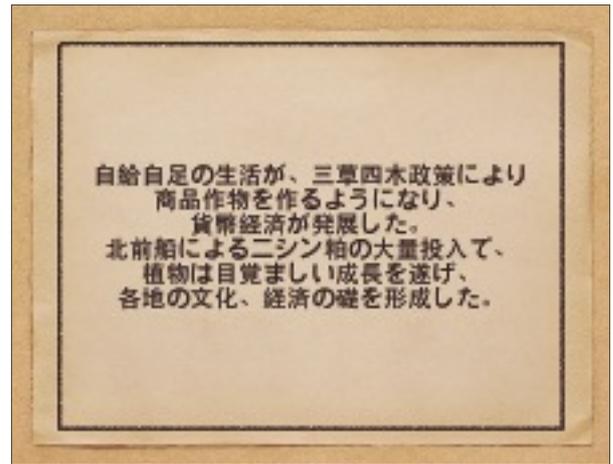


写真-15



写真-14

そもそもこの北前船というものは、三草四木政策と書いてありますが、江戸時代に御上が3種類の草、4種類の木、それぞれの地域に合った植物を植えなさいと、そういう御触れを出しました。(写真-13)

そのような御触れが出まして、それぞれの地域はそれぞれに合ったものを植えたわけです。三つの草とは藍・麻・紅花、染めのものです。そして4種類の木というのは、桑、お茶、そして漆の木、楮の木です。桑の木をたくさん植えた丹後半島などは美しい丹後ちりめんという文化を生み出しました。そしてそれが北前船の着物の積み荷として載せられました。お茶を植えたところは茶箱として本当に全国にお抹茶の文化をさらに広げました。漆を植えた輪島は輪島の漆器として非常に大きな経済的な礎を得るこ

とができました。楮の木を植えた若狭などは若狭の和紙として、越前和紙として、明治維新になって日本で初めてのお札は若狭の和紙でできました。これらに全て鯨粕が投入されたわけです。非常に豊かな良質な肥料であった北海道の鯨粕はこれらの植物を豊かに育てて、その結果、文化を生み出したわけです。(写真-15)

絹織物であったり、漆器であったり、茶葉は生活を豊かにもしました。和紙といったような流通商品もたくさん生まれたわけです。それまでは自給自足の生活がずっと続いていたものが、三草四木政策によって自分達の商品・文化、そう言ってもらえるようなものができてきた。漆器という美しいものができてきた。丹後ちりめんという本当に美しい着物が生まれるようになった。そのようなことから、経済の礎というものが、この北海道の鯨粕によって誕生したわけです。

ではここで、チェンバロ、豎琴の響きをお聞きいただきたいと思います。先程演奏しましたバッハ、江戸時代の作曲家、1685年に生まれた人です。全く同じ年1685年に同じドイツに生まれたヘンデルという人、とても近い村に生まれているのに、全く違う人生を歩んだのですね。バッハという人は一つひとつ自分の思いをレンガのように重ねて重ねて、音を重ねて重ねて、最後は神様のために音楽を作った人でした。へ

ンデルというのはもっと人が好きで、人の心にグッと食い込むようなそんな美しいメロディを作る天才でもありました。今から演奏します曲目はヘンデルの「懐かしき木陰にて」という曲です。これはエジプトの王様がカウチに横たわって、スズカケの木があって、自分の国の歴史を憂い、未来を思う時に歌われた、そんなヘンデルのオペラのアリアの一節です。あまりに美しいメロディなので、オペラとしては上演されなくなりましたが、メロディだけが脈々と続いています。ほぼ300年間歌われ続け、いろいろな楽器、バイオリンでもチェロでもフルートでも、ヘンデルの「懐かしき木陰にて」は「オンブラ・マイ・フ」としてご存知の方も多いのではないかと思えます。ではヘンデルの「オンブラ・マイ・フ」と、その時代に弾かれていた、本当に古い1500年代、日本で言うと室町の時代に弾かれていたような豎琴の響きで、イギリスの古い作曲家ウィリアム・バードの「パヴァーヌ」、2曲続けてお聞きください。

《演奏》

ヘンデル「懐かしき木陰にて」

ウィリアム・バード「パヴァーヌ」

ありがとうございます。

このような豎琴の響きを聞きながら、北海道がなければ、そして鯨という北海道の宝がなければ、全国のそれぞれの植物がこんなにも豊かに育って、それぞれからそれぞれの美しい文化が生まれて、そういったことはなかったですよ。北海道って素晴らしい。鯨粕のその北海道の宝物も素晴らしい、そして昆布という北海道の宝物も運びましたけれども、そんな北海道の宝物の素晴らしさを知ってもらいたい。それを各地の皆さんにお伝えをして歩いています。

元々蝦夷と言われていた時代、アイヌの方々
が稚内で1600年から大陸の人達と交易をはじ

め、古い時代から北海道の各地でそのような生活をされていました。それが明治になって、例えば屯田兵であったり、開拓使であったり、いろいろな形でどんどん入植が始まった。明治2年から明治10年までのたった8年間に非常に増えています。さらに明治10年から明治20年までのまたこの10年間に倍近くに増えている。(写真-14)

これは尋常ではない増え方です。そうなりますと、北海道に食べるものはあるものの、こんなたくさんの人が押しかけて大丈夫なのと。屯田兵や開拓使の人達が全て自分達の食物を持って北海道に来たわけではありません。衣服など生活物資も何も持たされずに来ている。そういった時に、北前船の上り便と下り便がありますが、いわゆる下り便として浪花から北海道へ大量の物資、それも生活物資の全てを北前船で運びました。(写真-16)

もちろん米から衣服からロウソクや素麺、全てです。油も運びました。同時に工芸品、美しいお茶の道具、それから茶道や香道などといった文化も伝わりました。お線香とともにお香の道も伝わりました。ですから今も札幌というのは本当に新しい町ですが、小樽であったり、釧路のような北前船の寄港地の方に、お香の先生であったり、お香の教室というのはたくさん残っています。こちらの方には脈々と歴史が

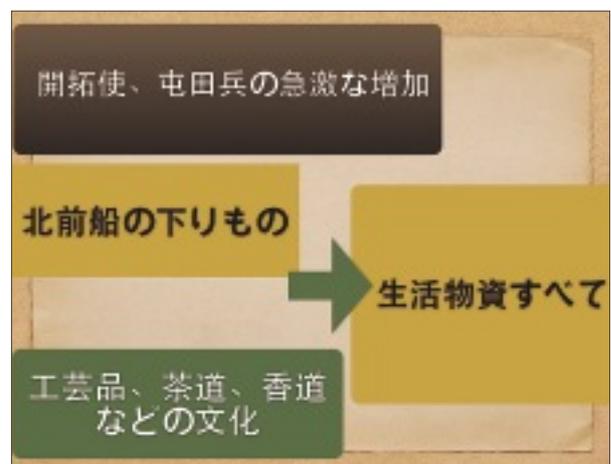


写真-16

残っているのだなと、つくづくそのようにも思います。

それぞれの港を訪れた北前船、江差の港にも非常にたくさんの北前船がやってきました。一時は江差の5月は江戸にもないと言われた、祇園祭りのような姥神大神宮のお祭り、本当に素晴らしい豪快なものです。そうやって鯨繁栄が息づく町として日本遺産に認定されたのです。雛人形も北前船が運んだものです。ですから、今では江差の町に全国からお雛様の時期になるとお雛様が写真のように届きまして、それぞれの蔵、それぞれの町屋にはこのようにぎっしりと床から天井まで飾られます。(写真-17)

そのようにして北前船が運んだ雛人形であったり、そして羽子板であったり、そういうものが時代への思いとともに江差に届いています。

北前船というのは前期と後期があります。前期はまさに先程の北海道の宝としての鯨の粕、肥料として8割がた使われました。あとの2割は京都などで非常に流行った鯨蕎麦の身欠き鯨として運ばれました。(写真-19)

そのようにして鯨粕、それから昆布です。四大昆布、利尻昆布、羅臼昆布、日高昆布、南茅部の間昆布です。それぞれが全く違った出汁が出ます。そのようにして4種類の昆布というのは、本当に味わい深いものなのですね。親子では是非昆布をたくさん使ってほしいと思いまし



写真-17

て、イベントをしています。今、昆布の消費量は富山と沖縄が全国1位ですね。北海道はうんと下の方なのです。こんなにも美味しい昆布をたくさん生産しているのに、もったいない。昆布のミネラルもそうだし、4種類の昆布の味がこんなにも違うことを知ってほしい。利き酒会ならぬ利き出汁会というのをやりました。4種類の出汁を揃えて、皆さんにちょっとずつ味わって頂きました。塩も何も入っていません。出汁だけの味です。こんなに出汁だけで味が違うのですかと、皆さん驚いていらっしゃいました。そういうことは、それで作るお吸い物も随分味が違うはずですよ。スーパーでもいつも4種類売っています。手に取って一度試してみてください。非常に面白いです。そのようにして北前船の前期は北海道の宝物を全国200カ所に届けました。

そして北前船の後期ですが、先程の屯田兵や開拓使の人達がどんどんやってきましたので、そんなこともあって衣料品ですね。美しい着物もそうですが、いわゆる「どんざ」と言われたり「裂き織り」と言われたりするようなもの、着古した着物を裂いて裂いて新たに織るのです。そうしますと、分厚い着物になって、寒冷地でも少し温かい。そういったものもたくさん運ばれました。もちろん食物も。そして小樽の運河プラザにはシャチホコの立派な瓦が載っています。あちらには10万枚の瓦が載っているのです。小樽の運河の真ん前にある観光センターになっていますが、あちらは10万枚の瓦、それも北前船がバラストとして運んできたものです。

そのようにして北前船の前期と後期では運ぶものが随分変わりました。(写真-18)は我が家に残る江戸時代からの港の買目録です。例えば敦賀であったり、越後であったり、それぞれの廻船問屋さんのところに行って、買目録を渡して、例えば身欠き鯨を何束であったり、筵を買

うだとか、いろいろなことが書かれています。私はこういったところもお尋ねして、交流を温めたいと思っています。

そのようにして、北前船が訪れた寄港地が西回りだけでこれだけあります。北海道と言いますと、実はもっともっとあるのですね。細かく言いますと100カ所以上あります。(写真-20)

そして高田屋嘉兵衛などは北方四島の航路も開拓した人ですから、そのようにして北方四島まで北前船は行っていました。北は利尻島まで東は北方四島まで、そのようにして鯨を追いかけて、北海道の宝物を全国に送っていたのですね。兵庫県などは県北には久美浜であったり竹野であったり、県南には神戸があります。そして室津というところ、そして坂越、ちょっと小さいですが赤穂市の塩田の場所です。入浜式塩

田だとか、それぞれの港の工夫があって、干満の差を利用して作られた塩田に大量の塩が出来上がっている。それを北前船が運んで全国へ届けたと。そのように塩を運んだところもあるわけです。

まさに春に浪花の港を出港して秋に浪花の港に戻る、そのような船、(写真-21)は浪花丸という船です。実は大阪に「なにわの海の時空館」という北前船の博物館がかつてありました。そのこのドームの中に入れるために1回だけ海の中を航海したのですね。この「なにわの海の時空館」、まさにこのガラスのドームです。(写真-23)

そして入り口が非常に面白くて、陸地の部分がエントランスの部分です。(写真-22)

こちらから入りまして、そして海底の通路を通して先程のドームに行くのですね。(写真-24)



写真-18



写真-20

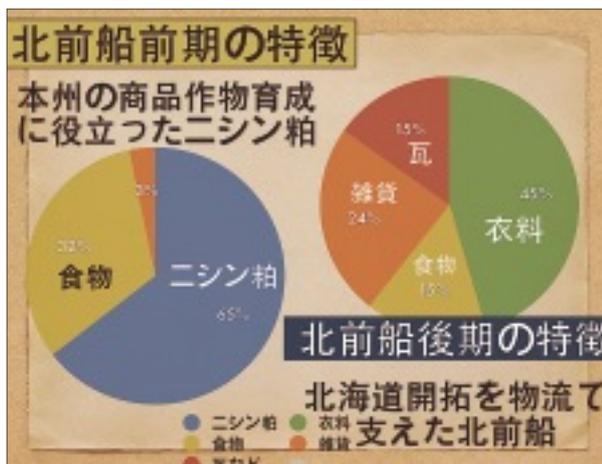


写真-19

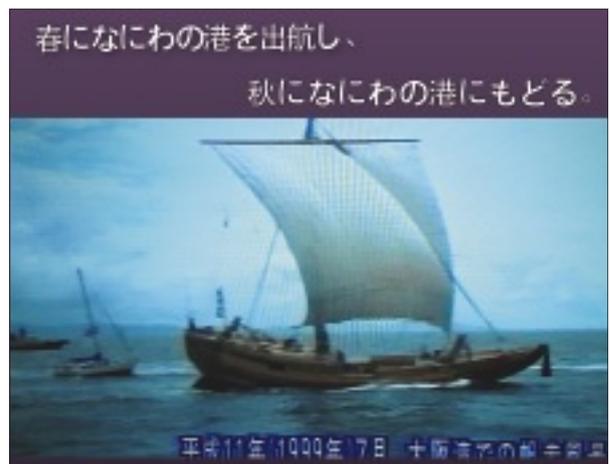


写真-21



写真-22



写真-24



写真-23



写真-25

そして下からずっとエスカレーターを上がっていくと、北前船の船底から見えて上がって行くような非常に面白いづくりの博物館でした。この船底から上がっていきます。そして1階・2階・3階とずっとドームを巡るようにして丸く上がって行きまして、上からも見られる、中にも入られる、本当によく研究された、そして学芸員の方の解説も素晴らしい、そんな博物館でした。今は残念ながら廃館になってしまいましたけれども、これは大阪が水都であったと、水都浪花のまちであったということ復活させるためにも、また見られる時期があったら良いなと思っています。

その大阪ですが、天下の台所として、一番手前にありますのが天保山です。そして住吉の高灯籠が見えて、それを目印にしてどんどん

どん全国から来た北前船がこの南港、今のUSJがある近くに南港がありまして、ずっと入っていくと、安治川という川です。(写真-27～31)

ではまたここでまた演奏をお聞きいただければと思います。このようにして私は五代前の先祖の思いを受け継いで、寄港地200カ所の皆さん、その港を巡って、その港の歴史を知り、そしてその土地の皆さんともう一度港の歴史に思いを馳せましようという、そのような活動をしています。そんな中で私の大好きな曲があります。それは「ハナミズキ」と「涙そうそう」です。「ハナミズキ」はあなたの思いを叶えなさいという、「空を押し上げて」という素敵な歌詞がついています。そして「涙そうそう」は古いアルバムをめくっていくと懐かしい顔がたくさん出てくる。どれだけこの人達のお陰で今の自分

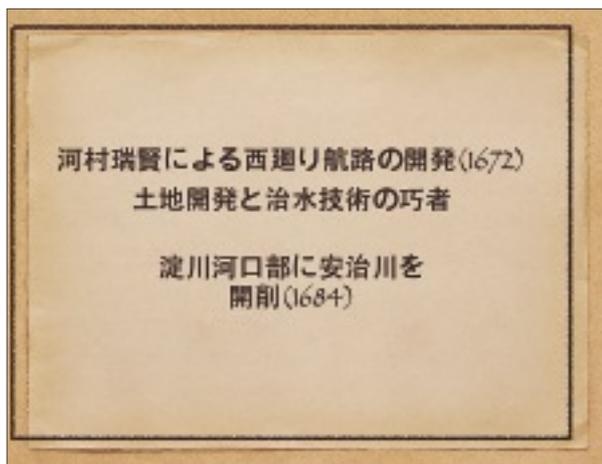


写真-26



写真-29



写真-27



写真-30

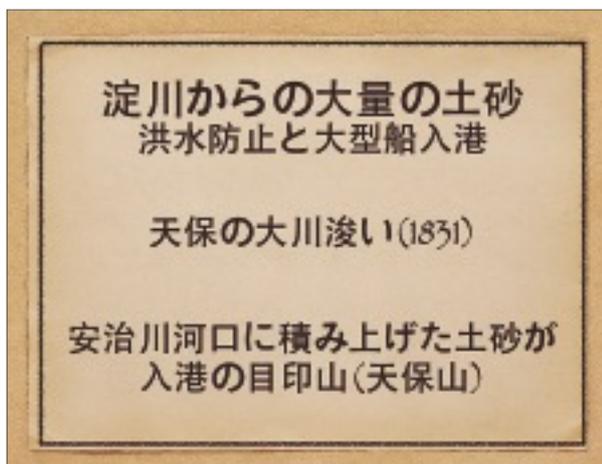


写真-28

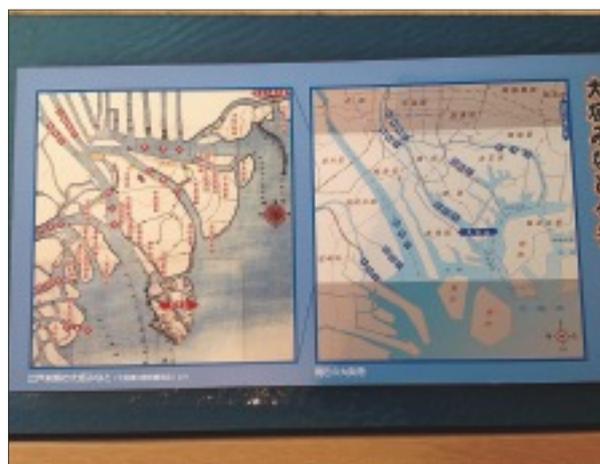


写真-31

はいるのだろう。「ありがとう、ありがとう」といったような、素敵な歌詞がついた、その「ハナミズキ」と「涙そうそう」を2曲続けてお聞きください。

《演奏》

「ハナミズキ」
「涙そうそう」

ありがとうございます。
港というのは湾や河口にあり、そして防波堤を造ったり、あるいは船が安全に停泊したり航

行したりできるような、そのような場所であり、そして海上交通と陸上交通の要であり、そういった母親のようなとても大事な、帰ってくる場所でもあります。そのような港、河村瑞賢によって西回りの航路と東回りの航路というふうにつくられました。(写真-26)

その中には母なる港がたくさんあります。西回りの航路は先程皆様にご覧いただいた、まさに浪花から出て瀬戸内海、そして下関から日本海に、そして北海道。北海道の宝物をたくさん積んでまた戻ってくる。その航路がまさに西回り航路です。1672年に河村瑞賢がそのようにつくりました。またこの河村瑞賢という人は、土地の開発と治水技術に非常に長けた人でもありました。ですから、淀川の河口を開削しまして安治川が造られました。その安治川に北前船がどんどんどんどん戻って行っていた。安治川をこのように開削した時にも、たくさんの土砂が出まして、その出た土砂をよいしょと積み上げていたのが薄っすら築山のようになっていました。さらに淀川からの大量の土砂がもっと出てくるようになって、これは洪水の防止と大型船の入港のためにも何かしなければと。そんなことから大川浚いということで、安治川河口に積み上げたその土砂がさらに入港の時の目印山として土砂をどんどん積み上げた。それが今の天保山なのですね。(写真-28)

「日本で一番低い山だよ」というコマーシャルがありましたけれども、まさにそうです。しかしそれを目印にして北前船は戻ってきていました。全国各地の美味しいものをたくさん満載して戻ってきて、天下の台所と言われた大阪です。北斎も(写真-29)のように天保山の絵を描いています。

そして(写真-31)左側が江戸時代の大阪港です。左側にあったのが安治川の開削された後の部分です。右の方に見えるのは木津川ですね。こちらが安治川で、先程北前船がどんど

入っていました。そしてもう一つ木津川というのがあります。この木津川の河口も大きな港でした。これが現在の大阪港です。そのようにして天保山を見ながら戻ってきた北前船、まさに住吉大社の高灯籠もあり、それが灯台の役目もして、どんどん戻って参りました。戻ってきた北前船の荷はどうなるのかと言いますと、それぞれの藩屋敷の出した小舟に乗せ換えます。そして一齐に自分達の藩屋敷の蔵に戻って行くのですね。こんなにたくさん水路があっただろうかと思われると思います。写真はまさに梅田の辺りですね、中之島。こんなに水だらけと思われませんが、まさに浪花は水都だったのですね。この一番太い大きな運河を埋め立てて、四つ橋線、御堂筋線という、一方通行の道路ができました。(写真-32)

子供達にも浪花が水都であったことを知ってもらいたい。そんな思いから大阪でも北前船の活動を特に子供に向けてやっています。大阪は遊ぶ場所だけではないのだよ、こうやって水の都だったのだよ、ということも思い出してほしいと思っている次第です。

そしてそんな思いから、是非何かと思って作ったのが、現代版北前船プロジェクトでした。(写真-33)

まさに現代版として、何かもっとみんな、港で繋がっていけないだろうか。海の仲間とし



写真-32

て繋がっていけないだろうか。北前船というのは三方よしというのが非常に皆さんで固く思いを結んでいるものです。店よし、客よし、世間よし、みんなが良くないと駄目だよ、それがまさに北前船の理念なのですね。(写真-35)

そして港町と海の道、もっとネットワークづ



写真-33

くりができないだろうか。そしてまさに北前船はいにしえの宝だ。もっと言えば北海道の宝物を全国に届けたこと、そして届けたことによってそれぞれの町にも新しい宝物が生まれたこと。文化という宝物が生まれたことを思い出しませんか。そして港とともにもっと元気になっていきましょう。そんなことがやりたくて、現代版北前船プロジェクトを作りました。そのことによって、例えば舞鶴の港でもこのように北前船のフォーラムが行われ、舞鶴にはやはり古い裂き物の衣類がこうやって残っていたのですね。(写真-34、36)

全て裂いて農家の人のために作られたものが展示されていました。それがこの裂き織りなのですけれども、このように美しいバッグにも北海道で蘇りました。(写真-37)

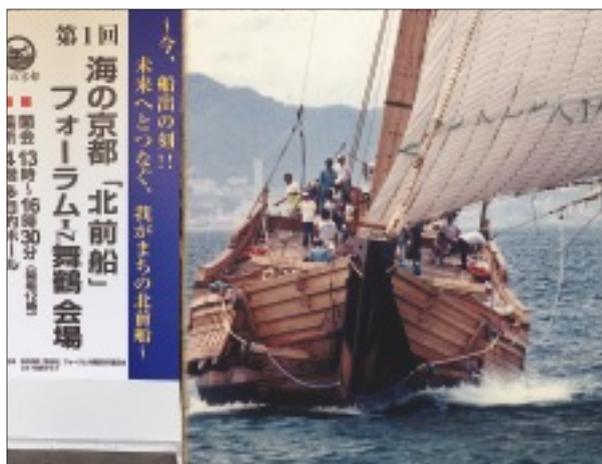


写真-34



写真-36

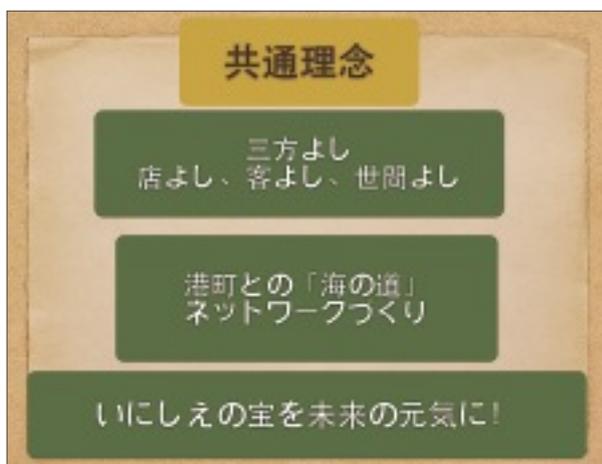


写真-35



写真-37

これは着物を細く裂いたものを織りまして、そこに美しい刺繍、そして持ち手のところはエゾシカの皮になっています。まさに北海道の北前船とエゾシカという北海道を象徴するような、そういったスタイルがまさに札幌スタイルとして認定されたのですね。非常に人気のある商品でもあります。

これだけではなく、全国でも裂き織りはブームでして、このように鮮やかで、目が詰まっていますからとても暖かいのですね。がま口などの小物からスリッパまで、全て要らなくなった衣類の裂き織りです。(写真-39)

本当に素晴らしいと思います。こういったことで布を大事にしていく、そんなことに繋がるのでしょうか。そして、これだけではありません。例えば岩手県の盛岡などは、さんさ踊りの



写真-38

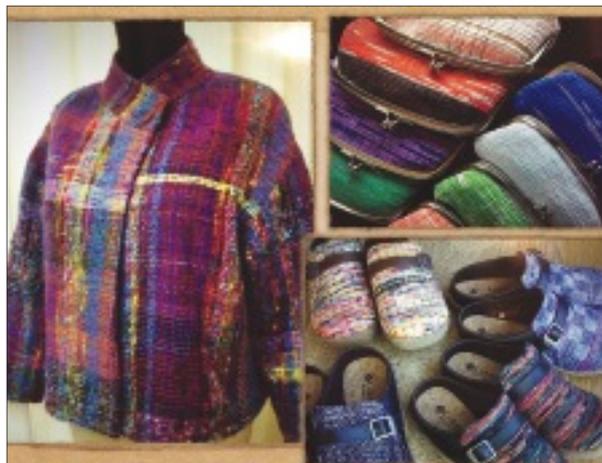


写真-39

鮮やかな黄色やオレンジの原色の浴衣なのです。でも毎年たくさんの人が着るのでどんどん古着が出てくる。どうしたものだろうと思って、それを裂いてこのように裂き織りにして、南部鉄器とコラボして灯りも生まれました。(写真-38、40)

このようにして新しい商品がまた港から生まれているわけです。

そして東北だけではありません。九州の古伊万里、伊万里港です。本当に美しい有田焼。有田の町には日本で唯一、朝鮮の人を祭った神社があります。陶山神社、陶器の山と書きます。秀吉が朝鮮出兵で連れ帰った朝鮮の陶工が本当に固い白磁の器を作るために歩き回りやっと見つけた泉山という真っ白な土の出る山、それが有田にあったのですね。そんなことから、有田焼という日本で初めての白磁、中国のものではない輸入のものではない、日本独自のものが生まれました。そして有田焼が九谷焼や清水焼の基となりました。(写真-41) は時計ですけれども、非常に豪華できらびやかなものです。これは輸出用に作られたものです。江戸時代、日本は鎖国をしていましたけれども、唯一長崎の出島からたくさんのもものが輸出されていました。それがまさにこの有田焼です。伊万里港から輸出されて長崎の方に行ったので伊万里、そしてまた江戸時代から扱われていたものを古伊万里



写真-40

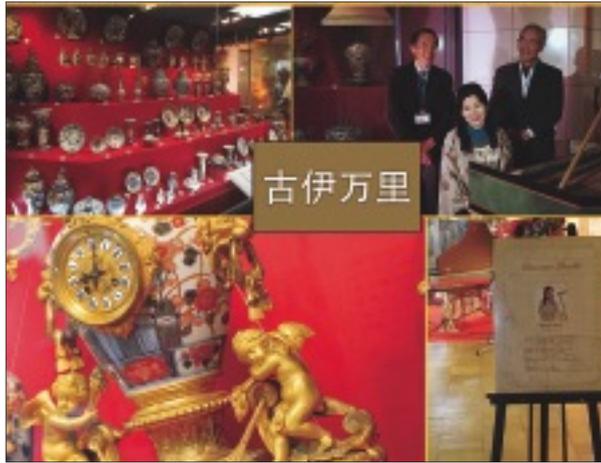


写真-41

と言います。その古伊万里は金欄手という特別な極彩色のもの、そして金属も本当に美しいゴールドがたくさん入ったものが輸出用として使われました。そして行った先がベルサイユ宮殿だったのですね。おそらくベルサイユ宮殿では王様のルイ 14 世が貴族を集めて毎週このように宴を繰り広げていました。その中心にあったのが、チェンバロです。おそらくベルサイユ宮殿ではチェンバロと古伊万里との出会いがあったのではないだろうか。そんなことから「古伊万里とチェンバロの出会い」と題して、九州の佐賀県の陶磁文化館という美術館でもコンサートをして参りました。

ではここで1曲、まさにそのベルサイユ宮殿で弾かれていた曲を弾きたいと思います。古伊万里に囲まれて、そしてルイ 14 世が愛でていたチェンバロ、そこで弾かれていたもの、ベルサイユ宮殿と聞きますと、本当にきらびやかで、椅子や机なども猫足でロココ調というのでしょうか、本当にもう装飾だらけです。ですから先程の「アヴェ・マリア」やヘンデルの「オンブラ・マイ・フ」のようにシンプルなメロディの美しさといったものとは全く違って、フランスバロックというのはとにかく装飾音が多い。繰り返した時には違う装飾をつけるように、そういったことまで求められるような、そんな音楽

がフランスバロックの特色かもしれません。では、ルイ 14 世に捧げられました、ラモーという人が作った「王の舞曲」をお聞きください。

《演奏》

ラモー「王の舞曲」

ありがとうございます。

毎週毎週のように宴を繰り広げていたルイ 14 世そしてルイ 15 世、それを庶民が黙っているはずありません。フランス革命が起こってしまいました。そんな時に国民が思ったことは、チェンバロという楽器は贅沢品の象徴でした。一番に叩き壊されてしまいました。そして薪になってしまいました。世界史から消えた時代があったのですね。そうして彼らは考えた。チェンバロは細い弦をポンッと弾いているだけの楽器だそうじゃないか。そうではなくてもっと太い弦を下からドンと叩いて大きな音を出して、一気に 500 人とか 1,000 人とかを集めて、そして集める時は全部チケット制で集めて、そういった音楽がビジネスにならないか。そういった波が起こりました。そんな中で生まれたのが、ピアノだったのですね。ピアノは非常に太い弦です。そしてフェルトでくるまれたハンマーで下からドンと弦を叩いて音を出す、打弦楽器です。チェンバロは毎日毎日ぴったり合うまで調律しますが、そんなことはやってられないということで、ピアノは年に 1 回の調律で良いように作られました。そして調律師さんという職業が誕生しました。4 年掛かってやっと 1 台が生まれるチェンバロ。4 年も待てないだろうということで、もっと大量生産ということから、ピアノは 88 鍵と決められています。あの 88 鍵というのは工場の大量生産のレールの幅なのです。どっと年間何百万台も作られるようなシステムが生まれました。そしてピアノ製造会社というのが誕生しました。そうやって 500 人や

1,000人にチケットで売るという音楽マネジメント会社も誕生しました。そのようにして音楽ビジネスがどんどん回り始めたのです。500人とか1,000人を集めて弾かれた曲、「あの曲すごく良いね、あの曲の楽譜が欲しい」ということで、出版会社も誕生致しました。そのようにしてフランス革命を境に音楽がビジネスの世界へと変わって行きました。

チェンバロは本当に細い弦です。そして一緒にやっている仲間達のバロックバイオリンの弦はガット弦、羊の腸を振ったガット弦を張って、優しい音です。そして一緒にやっていたフルートの古楽器のフラウト・トラヴェルソは木の横笛、木をくり抜いただけ、穴が開いているだけの本当にシンプルな音です。でも温かい良い音なのです。そして真ん中はチェロのように座って弾く低音楽器のヴィオラ・ダ・ガンバというもの。それも太く振ったガット弦でヒュンヒュンと良い音で弾いていましたが、鍵盤楽器が変わってしまいました。鋼鉄の太い弦で下からドンと叩く。ですからバイオリンも金属の弦に変わりました。こちらのフルートは金属の棒に変わりました。そして真ん中はチェロという楽器、太い太い鉄線で、前は逆手だったのが順手で持って弦をギュッとやるとポワツと1,000人や2,000人のホールでも非常に美しく響きます。そのように楽器の歴史も脈々と変わっていったわけです。

そのようにして日本も江戸時代から明治へと移りましたが、外国でもどんどん歴史が進んでいってました。(写真-43)は伊万里の港です。アジアへのゲートウェイなのですね、伊万里というのはまさに。そして面白いのは、大変可愛いのです。欄干は全部磁器なのです。割れないのだからと私は心配なのですが、橋の欄干が全てこのようなものが付いていて、なんだか可愛らしい。先程の陶山神社はまさに白磁の神社ですから、鳥居も白磁でできています。真っ白



写真-42



写真-43

な鳥居です。そしてそこに染付の藍で竜がグワーツと巻き付いています。そのようなある意味パワースポットのような陶山神社、そして伊万里、素晴らしい町々が九州にはあります。

そうやってこの伊万里の歴史を知ってもらいたい。そういうことで、京都府の宮津の皆さんとも交流を持ちました。(写真-42)

宮津というのは天橋立のところですね。まさにこの三上家、向こうに座っていらっしゃるご亭主は清輝楼という江戸時代から始まった宿屋のご主人です。その旅館に残っている北前船の運んだ古伊万里の数々、そういったものをこちらの九州陶磁文化館の館長さんが学芸員さんです。その方が全部見て、「これは北前船で来たものですね」と、全てそのように見ていただきました。(写真-44)

そんな時でも私は札幌スタイルの裂き織りを是非皆さんに見ていただきたくて、現代版の北前船ですから、営業マンよろしく、こうやって京都府の皆さんにも見ていただきました。(写真-45)

とても皆さん驚いて、また喜んで買ってくだ



写真-44



写真-45



写真-46

さいました。このようにして宮津、そして海運業で栄えました宮津の三上家でもやはり集いを持ちまして、港の関係者の皆さんが集まられて、京都府の宮津という場所、由良川で栄えた北前船の来た港の話などで、本当に楽しいひと時でありました。(写真-46、47)

そして博多港という港、歴史ある場所です。住吉神社の能楽堂というところで、北前船の運んだ積み荷の中で最も美しい着物をテーマにファッションショーをしました。(写真-48)

住吉神社というのは全国に3,000社ぐらいあるのですが、その一の宮です。一番にできた、やはり歴史があるのですね、博多というのは。その一番にできた神社の能楽堂で美しい本当に夢のようなひと時でもありました。港を思い、そして北前船を思い、船を思い、そして美しい



写真-47



写真-48

白い帆を思い、先人の情熱だとか、志を思い、そんなひと時になりました。そして同じく北前船は茶箱も運んでいましたから、いらした400人ほどのお客様には皆様にお煎茶をお出ししました。これも北前船の運んだものですよということで、五感で感じる北前船、五感で感じる港の歴史、そう思い、この講演を致しました。

そうしてまた、この北海道では先程の利尻昆布。今からコンブ漁は本当に忙しくて、子供達もちょうど夏休みで良かったのかもかもしれませんね。非常に重労働です。しかしその利尻にも新しい風が吹いています。今までは捨てていたような海岸に打ち寄せられている海藻を集めて、海藻の押し葉です。右側のものは本当に海藻だけでできているのですね。そしてその前の方は押し花。海藻と押し花を使ったコンクール、全国で募集致しましたら、非常にたくさんの応募がありました。その中から知事賞であったり、利尻の町長賞であったり、とても美しい作品で驚きました。このような新しい一歩を利尻も見始めているのだなと、そんな思いがしました。(写真-49)

このようにして現代版北前船プロジェクトとして、北前船と言いましても、船は港がないと、これはどうしようありません。ですから、港、港、その港町を繋いでいく、そんな活動となります。そもそも北前船とはなんだろう。そういつ



写真-49

た楽しいイベントだけをやっているのではなく、本当に学ぶ会というのでしょうか、港がこのようにあって、風待ちの港であったり、そして北前船はこのようにして港を動きながら、そういったお話も例えば小樽の博物館長であったり、そういった方にもしていただいています。そしてフォーラム、そして番屋という北前船の乗組員のことを「水の主」と書いて「かこ」と読みますが、水主の寝床であった番屋を活用する。祝津にも鯨御殿がございますけれども、まさにそれですね。そして蔵の活用。小樽にもたくさん蔵が残っています。(写真-51)のファッションショーは小樽の地ビールの蔵を使って、江戸とバロックをテーマにヘッドドレスショーというのをしました。江戸とバロックをテーマというのは何だのと言われそうですけれども、まさに同じ時代、北前船が日本海を往来したのと全く同じ時代に海の向こうではチェンバロやバロックが愛されていた時代でもあったので、そういう二つの東と西の文化の在り様を楽しむと、そんなテーマでやってみました。非常にたくさんの応募があって、朝・昼・晩とあったのですが、合計して3,000人以上の方が、その地ビールの蔵にいらっしゃいました。

2010年に現代版北前船プロジェクトを創設してから、本当にたくさんの学びの会であったり、そして五感で楽しむ北前船であったり、港ってなんだろう、そんなことももう一度考えるような、そのような催しものをたくさんして参りました。そんな中でこの北前船のフォーラム、そして北前船の旅ですね。(写真-50)

新日本海フェリーさんに随分お世話になりました。新日本海フェリーさんはホームページに「我こそは現代版北前船」と書いてあったのですね。これはちょうど良いじゃないかと。そうおっしゃっているのなら是非協力してくださいということで、新日本海フェリーさんを使ってお願いしまして、小樽から乗って舞鶴まで、そのよ

うな旅をしました。募集しましたら一気にいっぱいになって、そのツアーを皆さんで楽しみました。小樽から舞鶴に行きまして、そして例えば天橋立にも行って、福井県の鯖街道も通り、そして大津にあります滋賀県の北前船の郷土館なども見て、歴史も学ぶという、そのような旅でした。その船の中が本当に面白かったです。200カ所と言いましても、本当にたくさんあるのです。一口で200と言いましても、あそこもここもとズラッと並べると、それぞれの土地の美味しいものもたくさん出てきます。その美味しいものを上手に使って、北前船の豪華ディナーを作ってもらいました。(写真-52)

料理長さんにも船と一緒に乗ってもらって作ってもらったのですけれども、本当にグルメ旅のようになりました。お客さんにとっては喜

んでくださいました。そしてその200カ所の美味しいものだけではなくて、今、北海道が未来を見て作ろうとしているもの、それは北海道の手作りのチーズ、それから北海道のワイン、そういったものもあります。だから、現代版北前船としましては、そのようなものも皆さんには是非食していただきたい。そういうことから、全道のチーズ作りの方々のもと一緒に載せて皆さんに味わっていただきました。そのような楽しい食事の時間、そして港を巡りながら船内ではワークショップ。まさに江戸時代というのは元禄文化が花開いた時代でもあります。歌舞伎であったり、近松門左衛門の浄瑠璃であったり、それから落語が花開いた時期です。それで(写真-53)のように落語を楽しんでいただきました。あるいはこれはまさにチェンパロとの関り



写真-50



写真-52



写真-51



写真-53

なのですけれども、1600年代というのはシェークスピアの時代でもありました。ですから、シェークスピアの一人芝居をシェークスピア劇場から来ていただきまして、チェンバロの即興で物語に音楽をつけながら、マクベスなどを朗読していただく。そんなひと時もありました。そうか、落語の時代はシェークスピアの時代でもあったのだ、近松門左衛門の曾根崎心中とも同じ時代だったのだと。それから絵本作家のあべ弘士さんも海だとか北前船をテーマにした絵をチェンバロの音楽に乗せて書いていただきました。そのような楽しいワークショップもいろいろしました。

そして(写真-55)は、祝津の港です。右にあります北前船の鬼瓦が載っています。これは青山家ですね。青山別邸です。お嬢様の政恵様が



写真-54



写真-55

まさに素晴らしい豪邸が欲しいとおっしゃって、それもよいだろうということで、思いの丈を全て実現したのがこの青山別邸です。是非皆さん、祝津に行かれることがありましたら、一度足を踏み入れてください。素晴らしい古伊万里も並んでいます。そして祝津の鯨御殿、番屋ですね。そういったもの、港町の役割と風景ということで、今後もどんどん活用していこうと、港を元気にしていたものを私達もさらにどんどん活用して知ってもらおうと、そのような活動をしています。海陽亭というまさに鯨大臣が毎夜毎夜宴会をしていたであろうという小樽の海陽亭も素晴らしい、そのような建物でもあります。(写真-54)

そしてまた大事なことは、先程のお話しにもありました小樽の港の物語ですね。防波堤など、非常に興味深い歴史を持っています。その歴史を若い人に知ってほしいということで、写真の遠足を企画しました。(写真-56)

防波堤への遠足です。そして防波堤をぐるっと回って、いろいろな学びを得た後は運河プラザに集まって、やはりまた北海道の手作りチーズやワインに合うニシンの創作オードブルで、食のいろいろ楽しいひと時を持ちました。また小樽の総合博物館には明治時代の鯨漁の白黒写真が何百枚も残っています。それに映像作家の若い男の子達にいろいろな楽しい仕掛けをして



写真-56

もらいながら、子供達にも若い人達にも楽しんでもらうような映像と音楽のひと時を持ちました。

やはりそれぞれの地域の人達が、そして子供達が、自分の住んでいる港、そして村のことを知ってほしいということで、積丹でもこのような活動をしています。積丹の海は本当に美しく、積丹ブルーと言われていて。そしてウニもたくさんいる。美味しい昆布を食べて美味しい美味しいウニになる。この時期は本当に賑わっていますね。そういったことを知ってもらいたいなと思って、故郷の港を知る、そんな会をしています。(写真-58、59)

そしてこのウニ、ウニがどんどん昆布を食べてしまう。昆布を食べてしまうことで、海のプランクトンが薄くなってしまって、結果、ウニ

の味も良くない、昆布も美味しくなく、なくなってしまうということで、ボランティアさんにウニをたくさん捕獲していただきました。17万個程捕獲していただきました。その捕獲したウニを私達はツアーを作って、ウニ剥きツアーということで、積丹にドーっと押し寄せました。(写真-60)

ですから、海は昆布を食べるウニを排除してもらい、そしてお客様はお客様で喜んで、そして地域の人達もこれで海もきれいになっていくということで喜んでいくという、三方良しのそんなツアーを企画しました。それがこういったウニ剥きツアーとして形になりました。また積丹のことを知る、そのようなひと時も持ちました。

それぞれの港の歴史を知ろうと。そして伊丹



写真-57



写真-59



写真-58



写真-60



写真-61

の酒蔵とありますが、元々お酒というのはどぶろくでした。そのどぶろくが清酒になった瞬間、何やらいじめがあったようですね、この時代にも。ちやほやされていた酒造りの一人の青年のことを面白くないということで、その酒の中に炭を入れたと。そうしたらその濁っていたものが沈殿して清酒になったと。それが清酒の始まりらしいです。日本で初めての清酒を生んだ伊丹の酒蔵でも、そんな北前船のお話を致しました。(写真-61)

ではここでもう1曲お聞きいただきたいと思います。中島みゆきさんの曲を弾きたいと思います。中島みゆきさんの「糸」という曲。それぞれの港で私はいろいろな方との交流を持たせていただいておりますが、「あなたが横糸、私が縦糸ということで、そうやって織りなした一枚の布がたくさんの人を温めるでしょう」と、そんな素敵な歌詞が付いています。では中島みゆきさんの「糸」お聞きください。

《演奏》

「糸」

ありがとうございます。

このように本当にいろいろな土地の皆さんと交流を持たせていただいて、その港みなとの特徴であったり、歴史であったり、本当にいろいろ

ろ学ばせていただくと、それぞれに特徴があって、それぞれの思いがあるのだな、そんな大事な大事な時間を過ごしています。

まさにこれは先程の浪花丸、そして全く同じ千石船で陸奥丸というのも、北海道にやって参りました。(写真-63)

2011年にかけて、陸奥丸が全国10カ所に参りました。北海道は小樽だけでしたが、参りました。そのようにして陸奥丸を知って、子供達もこんなに大きいのだ、千石船ってすごいねと思いつつ見に来てくれたようです。ヨットマンの人達がこのように北前船を豪快に操舵してくださいました。陸奥丸はそして秋田県にも行ったのです。その時にも秋田の北前船フォーラムというのが行われました。(写真-62)

私もほんの少しですがお話をさせていただき



写真-62



写真-63

まして、フォーラムが終わりステージから下りたらワーツと一人の方が駆け寄ってくださって、「150年ぶりのご縁ですね。うちも廻船問屋だったのですよ。おそらく取り引きがあったのでしょうね」とそんなお話しで盛り上がりました。そうやってそれぞれの土地にきつとご縁のある方がいらっしゃるのだと思うと、いつもどの土地に行っても、とっても懐かしい思いがします。

そんなことを私が1カ所1カ所もちろんそうやってお尋ねして、そして交流を持って港を知ることとても大事ですが、現代版北前船として電波で繋ぐ北前船はできないだろうか、そんな思いもありました。それで、この北海道のラジオ局ですがFM白石というところ、オーナーさんは福井の方なのです。「それで全国のFMラジオを繋ぎたいのです。それも西回り回船のラジオ局を繋ぎたいのですけれども」というお話をしたら、「面白いかもしれないよね」ということで、1時間番組を持つことになりました。(写真-64)

「チェンバリスト明楽みゆきのロマン紀行」ということで、毎週金曜日2時から3時、しかし皆さんお仕事ですから、再放送は日曜日の8時から9時、「NHKドラマがあるのだよね」と言われて、「お願いだから聞いてください」、そういう感じです。そういうふうにして1時間番組、

その中で20分だけ毎回「進め北前船コーナー」というのを作っています。これは各地の方に電話インタビューでゲストに出ていただいています。第1回目は福井県の三国にあります三国の観光協会の大和会長という方が「三国祭りは面白いのだよ」と、本当に三国祭りに行きたくなってしまいました。2回目はこのチラシにあります陸奥丸の帆を作った桑田テントの桑田社長にインタビューしました。江戸時代の日本の綿、今は全部外国製なのですね、綿花は。ですから、日本の江戸時代のものを作るのにとっても苦労したと。そんな話もされてきました。3回目は福井県の東尋坊に伝わる刺し子ですね。昔、洋服と言えば麻でした。スースーして寒いのです。その寒いのをどうしたかと言うと、刺し子で糸を入れて、目を詰めて温かくしたのです。しかし、その中で奥さん達は我が夫や我が息子には他所の旦那様より素敵な模様の刺し子にしたいと、そんな思いがあったようで、いろいろな模様の刺し子はその土地には伝わっているのです。それが北前船にも載せて、津軽のこぎん刺しという刺し子になっています。こぎん刺しというのを検索していただいたら、もういっぱい、ペンケースからいろいろなものが出てくる、美しい刺し子です。そんなことをこれからもどんどんやっていきたい。今はまだ12局ネットですけども、五所川原から萩野、山口県の萩まで、毎週皆さん聞いてくださっています。そんな中で楽しいゲストの方にどんどん出ていただけたらよいなと思っています。

そして子供にも知ってもらいたいと。北前船というのは俵物として鯨粕、そして昆布、そして干したアワビ、そんなようなものを運びましたけれども、現代版の俵物を全国に運ぼうよと。そして港のことをもっと知りましょうと思っていましたら、先程の絵本作家のあべ弘士さん、「嵐の夜に」が歌舞伎にもなりました。そのあべ弘士さんが、自分の絵本の原画を俵物にして全

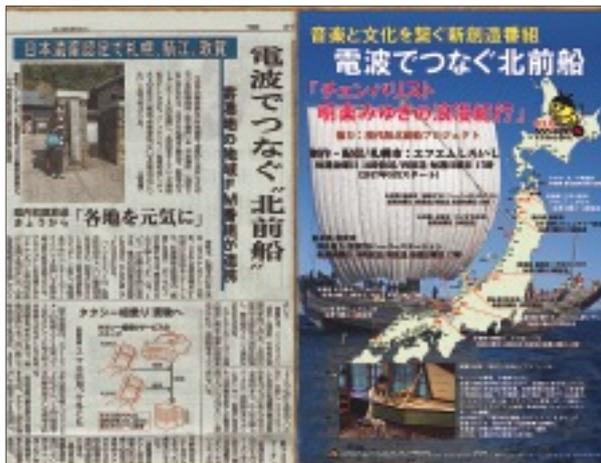


写真-64

国に回したら良いよ。そうやって子供達に楽しんでもらいながら、こうやって回って行きながら、その土地その土地の人達と仲良くなって、その土地のことを知るのだよと。そんなことをやってみたらということで、この俵物を回す子供プロジェクト、現在も進行中です。(写真-65)

そんなことから北前船をたくさんの人に知ってもらいたい。子供達にも知ってもらいたい。子供新聞のようなところにも、このような可愛い北前船を描いていただきました。

今後は連携と交流の広域ネットワーク。何と言いましても、やはり北前船は船頭さんの才覚によりますが、商才ももちろんそうですけれども、行った先々の港では豪商の旦那衆が待っているわけですね。お茶会に行こう、お香の会に行こう、短歌の会に行こう、句会に行こうと誘われる。そこで気の利いたことができないとやはり可愛がられない。そういうことでやはり文化の楽しみのある人が船頭さんとして非常に可愛がられたのですね。ですから、文化と商いの両輪が商売を成功させたわけです。そんなこともあって、商いの面、文化の面、どちらもこの北前船プロジェクトでは楽しんでいけたらよいなと思っています。(写真-66、67)

風待ちの港はやはり入り込んで美しいジオパークにも認定される地形ですね。そして鯉街道という、鯉はどんどん北へ北へと上がりまし

た。そのルート。そして昆布ロード、利尻や羅臼が入っています。そのようにしてそれぞれの港の宝探しをどんどんしていこうと。そうやって海の道のネットワークをどんどん作っていこう。もちろん三方良しのパワーパートナーですよ。そして文化と経済の両輪です。お金のことだけではなく、やはり文化でも豊かに、そんな素養のある人をどんどん作っていきましょうよ。それも何と言いましても、北海道というのはたくさん地域から入植している、そんな地域でもあります。東北がやはり一番ですが、北陸からもたくさん、四国からも中国地方からも近畿からも、そんないろいろな地域からの皆さんの知恵の結集が、この北海道でもあります。(写真-68)

その北海道で是非、来年、この「北海道」命

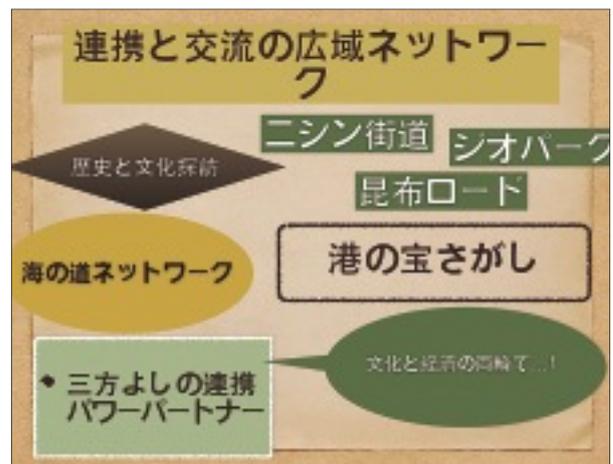


写真-66

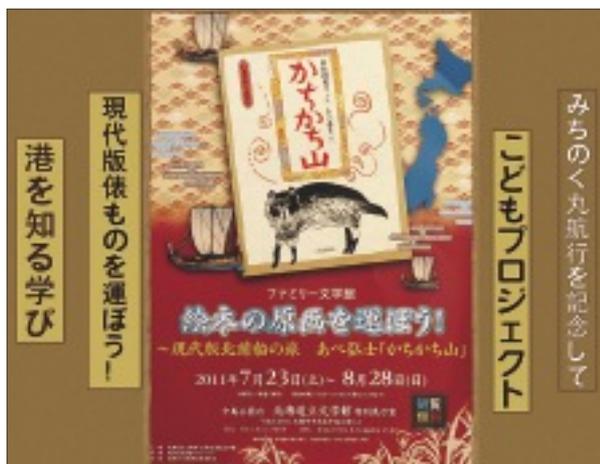


写真-65



写真-67

名150年を迎えようではありませんか。そんな思いでいっぱいあります。(写真-69)

松浦武四郎がこの「北海道」、北の海の道と書いて150年目。(写真-71)

そしてこの松浦武四郎という人は探検家でもあり、6回も蝦夷地、3回は蝦夷の時代、4回目からは明治政府の人として北海道にやってきました。くしくも来年は松浦武四郎生誕200年でもあるのですね。三重県の松坂の人です。おそらく北海道と松坂との交流も非常に濃くなることだと思われまます。

そしてついこの間もあった第20回の岡山の北前船寄港地フォーラム、もう20回目になりました。(写真-70)

それぞれの地域で皆さんが集まって寄港地を盛り上げています。今回、岡山は、この中部地

方というのは朝鮮通信使の歴史もあり、また大陸からの流れもありということで、第23回の北前船の寄港地フォーラムは中国の大連市に行くことになりました。なんとこの大連市というのは湾の中の半島の先にある、朝鮮半島の直ぐ横の地域です。今、中国は一带一路構想というのを持っていて、中国という大きな国の南はこの大連市のハブ港として、どんどん世界に向けて発信しようという港です。北はシルクロードとしてヨーロッパとの交流をもっと盛んにしよう。シルクロードと港というテーマで中国は動き始めている。そんな中で第23回の北前船フォーラムも中国へと参ります。

現代版北前船プロジェクトとしては多くの皆さんとこうやって150年を迎え、フォーラムもそうです、そして港の歴史をもっと味わって、

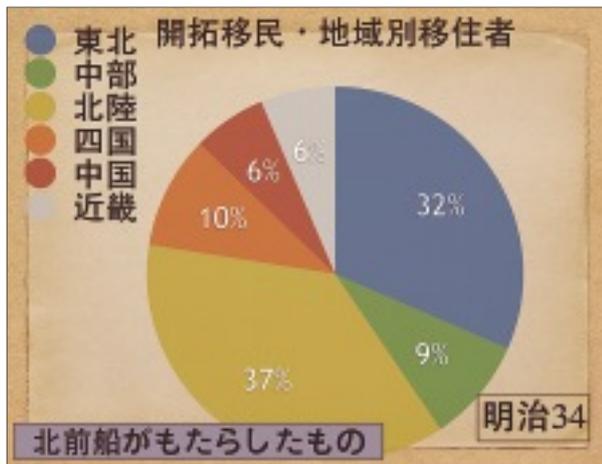


写真-68

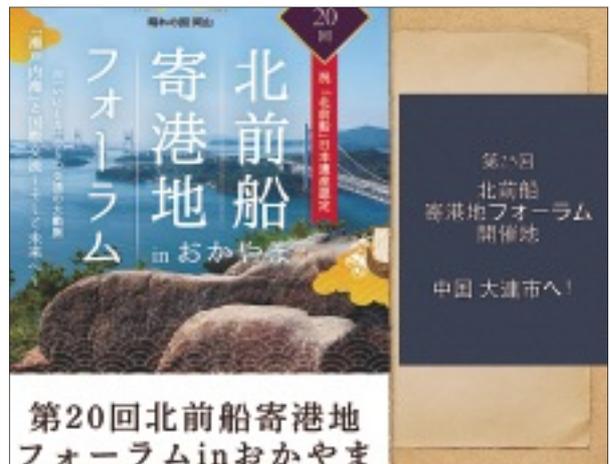


写真-70



写真-69



写真-71



写真-72

北海道は四方を海で囲まれているのだよね。北前船の寄港地も実は100カ所もあるんだって。浦河にもありますし、釧路にも根室にもあります。そして利尻にもある。留萌、増毛、もう言い出したら切りがありません。そういう人達の交流をもっと持てないだろうか。もちろんセミナーや講演会も素晴らしい。しかし子供やお母さん達が楽しむような、なんだか五感をワクワクさせるような、そんなイベントもできないだろうか。そして食もあり、美味しいものがいっぱい、北海道内だけでも美味しいですが、200カ所のものを集めると、これはもう鉄壁ですね。素晴らしいディナーやランチも生まれます。そんなことができればよいなと、そのように思っています。どんどん実現させたいとも思っています。(写真-72)

それでは次に演奏します曲目は日本の歌を弾きたいと思います。「この道」という曲、そして「からたちの花」という曲です。「この道」というのは、北海道の道です。本当に素晴らしい歌を山田耕作が作りました。では2曲続けてお聞きください。

《演奏》

- 「この道」
- 「からたちの花」



写真-73

ありがとうございます。

このように現代版北前船としてそれぞれの地域の皆さんと交流していただいております。北海道の中でも例えば苫小牧のように現代版北前船がどんどん来る豊かな港、そして小樽には空知の石炭があり、そして室蘭の鉄があり、近代の三都物語を物語るような素晴らしい町、本当に北海道の豊かな町、そしてオホーツクの町々、いろいろな方々とこれからも交流を持って行きたいと、そのように思っています。(写真-73)

そして港だけではありません。やはり川の存在は非常に大きいです。前に阪神大震災がありました時に、もっとなぜ川を使わなかったのだろうと。高速道路がボタンと滑り台のようになってしまって、誰も西の方に行けなかった。実は淀川がずっと浪花に入っていて、そしていろいろな交流が大昔からあったのに、なぜそこに気がつかなかったのだろうということで、大阪では川を使った防災と北前船、そのような視点でも動き始めています。このような石狩川、北海道の母なる川ですね。川と港との関係、これからも大事にしていきたいと思っています。(写真-74)

では最後の曲となります。1920年頃になりますと、まさに小樽にも日銀ができ、三井銀行ができ、まさに商都としてきらびやかなそんな時代を迎えます。1800年の終わり頃から北前船の



写真-74

船主達はどんどん転身し、呉服屋さん、酒造り、そして「嵐になると、いつも積み荷は上から捨てられるのだよね」と、軽い積み荷の人達から保険という概念が生まれました。そんなことから東京海上のように保険屋さんになられた方もいらっしゃいます。そして銀行家になった方もおられます。その銀行家になった方々が1800年代の最後の辺りに、福井銀行の元となった森田銀行、そして小樽でもたくさんの銀行が生まれました。

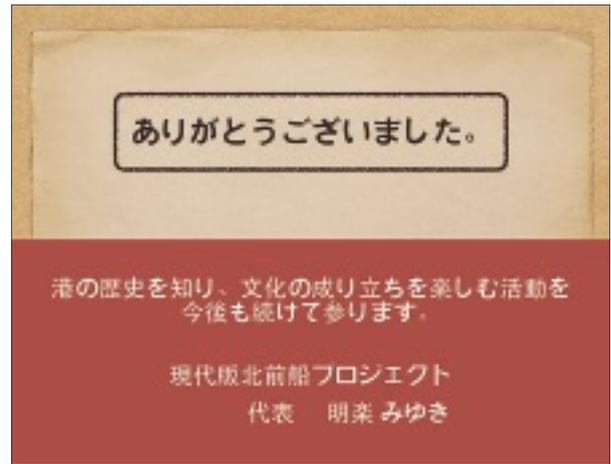


写真-75

そんな時代に非常に人々の心を豊かに、そして楽しませたのがタンゴという音楽です。ピアソラのリベルタンゴ、最後にお聞きください。どうもありがとうございました。

《演奏》

ピアソラ「リベルタンゴ」

どうもありがとうございました。